クールな天女

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クールな天女

【Ｎコード】
Ｎ３６０５Ｆ

【作者名】
神童サーガ

【あらすじ】
容姿端麗、スタイル抜群、頭脳明晰良し、唯一、性格が読めない女の子、那瀬。彼女は究極の逆ハー体質なのだ。究極の逆ハーとは、男女からモテる。しかも、男しか興味無い男さえも惚れてしまう。そんな那瀬は、色んな事件に巻き込まれてしまう。普通じゃない小説。主人公があまり出ないし、視点も主人公の周りの人達。

1話　消えた学校（1）　プロローグ（前書き）

あまり会話はありません。

1話　消えた学校（1）　プロローグ

いつものように、お嬢は目を覚ます。メイドに着替えを手伝わせ、白のワンピースに着替える。
日焼けやシミが無い白い肌、更に眩しい。
シルクのように柔らかい漆黒の髪。枝毛や癖毛が無い腰まで伸びた髪。
天使の輪が本物の天使に思わせる。
利き手で髪を掻き分ける。サラサラと流れ定位置に戻る。

「いつものように、お美しいです。お嬢」
「・・・ありがとう琉川」

お嬢の声は、高過ぎず低過ぎず透き通った美声。
身体は豊満で、誰も文句の付けようが無いナイススタイル。
香水など付けて無いのに甘くて優しい香り。

「・・・」

唯一、性格はクールで喜怒哀楽が無く、他人(よそ)から見たら、何を考えてるか分からない。
でも、優しい人。困ってるメイドをいつも助け、財閥のお嬢様なのに我が儘など言わないし、無理も言わない。

「・・・っワ・・・っカワ・・・琉川！！」
「っ！！・・・はい。何ですか？」

ボーッとしていて、お嬢が話し掛けてきたのに気付かなかった。

「・・・こっちが何？」
「はい？」
どういう意味だろう？私は何かしてしまったのだろうか。
「急に黙るから・・・」
哀しげに目を伏せるお嬢。そんな姿も愛くるしく美しく綺麗だ。
「すみません。車の準備が出来ましたので・・・」
「ありがとう」
微笑むような優しい目。でも、お嬢は笑っているわけでは無い。
「では、行きましょう」
いつものように・・・
いつものように・・・
お姫様をお守り致しましょう

1話　消えた学校（1）　プロローグ（後書き）

視点の彼は、執事の琉川です。名前は決まってません。みんなは、彼女にべた惚れです。

消えた学校（2）

あ、来た。
この学校で一番・・・いや世界一美しい姫が。
彼女の名前は、那瀬（なせ）　優妃（ゆうき）
彼女の名前を呼べる者はいない。友達でさえ名字だ。
彼女には、何故か名字のほうが似合うのだ。
彼女は、那瀬財閥の御令嬢なのだ。
あまりの美しさに彼女は嫉妬されるどころか愛されてる。

「よっ！！十代」

遅れたがオレの名前は、十代（トウシロ）だ。
那瀬と同じ大学で同級生だ。

みんなはオレを十代（ジュウダイ）と呼ぶ。別にオレが極道だったり、財閥とかの十番目の代というわけじゃない。むしろ、普通のサラリーマン家庭だ。

「だりぃな・・・サボりてー」
「あぁ・・・でもな、那瀬サマのお姿を見れねーからな」

オレの友人が顔を赤めながら言った。
みんなが顔を赤らめるのは日常茶飯事なのだ。
確かに、那瀬の顔は一度見たいしな。
そして、オレ達は教室に入ってった。

「ッス。那瀬」
「・・・・・おはよう十代」

くぅ〜！！幸せだぜ！！那瀬は、あんまり話をする子では無いから中々名前で呼んでくれなかったんだが、つい最近呼んでもらえるようになったんだ！！
幸せったらないぜ。

「・・・？」
「どーしたんだ？那瀬」

急に辺りを見回した那瀬。ホントにどーしたんだ？

「・・・気のせい・・・かな」
「は？」

気のせい、ってなんだよ・・・

オレはまだ、これから起きる出来事に気付かなかったのだ。

消えた学校（2）（後書き）

視点は同級生の男の子です。みんな主人公が大好きです。

消えた学校（3）エピローグ（前書き）

一応エピローグですが、ストーリーは続きます。消えた学校のエピローグです。

消えた学校（3）エピローグ

花のように可憐であり。
鳥のように自由であり。
風のように掴めなく。
月のように神々しく。
私が気になる女性。

「おはよう那瀬！！」
「・・・ん。三月」

私の名前は三月（ミツキ）名字か名前か分からないって？そんな事、私が知らないよ！！

「どうしたの？」

はあ～！！今日も美しいよ～！！こんな美人さんなんて滅多にいないよ！！
私を心配してくれてる那瀬。幸せだにょー！！

「・・・」

ん？どうしたんだにょ？黙るなんて！！何かあるのかな？

「ッス。三月」
「おはようさん！！十代」

彼は私の幼馴染みの十代。容姿は至って普通なんだけど、まぁ、

普通よりもカッコいいよ！！
私は、普通なのにラブレターを貰います。物好きもいたもんだよ！！
性格は、バカって言われるけど性格じゃねーし！！ムカつくよ～！！あ、あと明るいって言われる！確かに暗いなんてこと今まで無かったな！あははっ。

「あれ？」

にょ～～！！地震だよ～～！！みんな立てないほど強い。あ、みんなって言っても朝早いから一桁位だよ。説明面倒いから止めるよ。
十代の「那瀬！！」という言葉が聞こえた。周りを見ると・・・あり？那瀬がいない。

「な、ななな那瀬は？」
「知らねー！！気がついたらいなくなってた・・・」

どこに行ったの～！？危ないよ～。ガラスだって割れるかもしれないし・・・あんな綺麗な柔肌に怪我でもしたら、地震め～！！許さないぞ！！

「治まった・・・？」

やっと地震が止まった。みんながホッとして立ち上がったが「キャー」という悲鳴が聞こえた。

「どうした！？」
「外！！」

女の子の声に外を見ると・・・・うぇーー！！笑うしか無いよ・・

・

こんな事あるんかな？だって・・・外が荒野って・・・

「どっかのＲＰＧじゃねーか！！」

「十代！言ってる意味が分らないよ！！」

十代が壊れた。分るけどね。今まで家や店があってコンクリートの道路があったのに、今は周りは何にも無い。地面は石があり、舗装がされていない。

「・・・マジかよ」

信じたくないよ～！！有り得ない。狐につままれた感じだよ。

『えーっ。ゴホン。気付いた人もいるが今、外は大変なことになっている。それで、学校に残っている生徒は体育館に集合しなさい』

冷静に聞こえるが、焦ってる声だった。イライラを隠してるようでもあった。

「十代・・・」

「俺は、那瀬を捜す」

「私も！！」

「外にいなければ良いな」

確かに、荒野となった外・・・何があるか分らないし・・・

「三月様に十代様」

ん？この敬語口調は・・・

「あ～執事クンの・・・」
「琉川さん・・・」

そう琉川！！え？なれなれしいって？私は敬うってこと知らないから！！って、本当はいけないんだけどね。那瀬のことは、名前よりも名字の方が可愛いし！！まぁ、いつもナッチャンって呼んでるから！！

「って何で？」
「主語がねーぞ」

しゅご、ってなーに？ははっ知りたくなーい！！勉強イヤーー！！

「私はお嬢より電話を貰いました」

琉川って敬語だけど敬語って感じじゃ無いんだよな～！だって、お電話とかもっと敬わないとダメじゃん！

「そういや那瀬が見つからねーんだ」
「どういう事ですか？」

表情が恐くなった。うん。恐い。琉川の背後に鬼が見えたよ。赤鬼と青鬼・・・ふざけて無いよ！？

「どこに・・・」
「今から捜すんだ」
「私も手伝います」

キョロキョロ見回す琉川。十代の言葉に頷いた琉川。もちろん私

も手伝うけどね！！

さて、この世界はどうなってんのかな？楽しみだなぁ！！だって、モンスターとか勇者とか出てきたら楽しいのになぁ！！

消えた学校（3）エピローグ（後書き）

三月はムードメーカーです。那瀬の正反対です。那瀬や十代とは良いコンビです。

2話　荒野との戦い（1）プロローグ

「あーーつーーいーー」
「ですね」

確かに、玄関なのに暑いがうるさいぞ三月。しかも、それに同意しない琉川さん。

「琉川さん・・・あんま暑くなさそうだな」
「呼び捨てで良いです・・・暑いですよ」
「じゃあ俺も呼び捨てで」
「わったしも～！！」

うぜぇ、黙れ三月。

「あり？アレってナッチャン？」
「お嬢ですね」

そういや、なんで琉川って、お嬢って呼ぶんだろ？やっぱ分かんねーや。

「那瀬！！」

校門で悩んだ表情をしている那瀬。

「・・・あ、みんな」
「何してんの～？きゃははっ」

黙れ三月。話が進まなくなる。昔から脱線女ってあだ名がついてたからな。

「お嬢？」

「魔王が・・・」

はい？魔王って何！？ホントにＲＰＧなのかよ！？

「姫を捜せって・・・」

那瀬は不思議ちゃんじゃねーし、頭がおかしいわけじゃない！三月みたいに・・・それなのに、何言ってんだよ！！

「まさか、この荒野に出て無いよな？」

「アレ見て・・・」

那瀬の綺麗な指の先を目で辿ると・・・

「瓦版？」

「今、江戸時代じゃないよ～変なの～・・・・・・・・・ってホントだ」

ムカついたので三月の頭を本気で殴った。「うぎゃっ暴力反対！！」って言ってたのを無視した。

「えっと・・・『平民達よ。我々の姫が行方不明になった。見付けた者には褒美をやろう』・・・下に“魔王”と書いてますね」

琉川は、瓦版を読んだ。

「ってことは、人がいるんだよな？」
「えぇ・・・平民ということは・・・」

俺の考えに同意した琉川。
わけが分らねーよ。なんで、こんなことに・・・

「なんか・・・魔王ってわりに・・・」
「あぁ・・・」

確かに三月の言うとおりだな。こんな風に魔王が表立っていいのかよ・・・
なんか、支配してるって感じもしないし・・・

「姫ってどんな子だろうねー！！まぁナッチャンに敵う子なんていないしー！！」

それには同感だ三月。琉川も頷いてる。やっぱ好きなんだな。
また無表情だ那瀬。う～む。中々、照れないな・・・

「あの・・・」

背後から少年の声がした。

「なに？」
「・・・僕、フィルって言います」
「フィルくんね！！」

三月は嬉しそうに話してる。
少年、フィルはオロオロしながら話した。

「お、お姉さんの名前は？」

犠牲者が増えたか・・・那瀬中毒。

フィルは赤くなった。

「・・・那瀬優妃です」

「那瀬サマ・・・」

やっぱり名字か・・・まぁ、那瀬も嫌そうじゃ無いし・・・

「一緒にいても良いですか？」

「・・・うん」

この時は、コイツの正体なんて知らなかった。

だからといって、悲しいことになるわけじゃねーし。

荒野との戦い（2）

みなさん初めまして・・・って誰に言ってんだろう?僕はフィルと言います。
僕が、どうやって那瀬サマを見つけたかというのを説明します。

・・・・・回想・・・・・

『ハァハァ・・・疲れた・・・』

僕は、ある人から逃げ出しています。
わけは話せませんが・・・

『・・・なに?あれ・・・』

休んで顔を上げたら見たことの無い建物があった。あんなデカい建物なんて、“あの人”の家かお城しか思い付かないし・・・

『・・・・・っ』

その建物から出てきた女性・・・

あまりの美しさに脈拍が上がった。こんなことなんて今まで無かったよ。
神秘的なオーラを纏った女性は、瓦版を見て驚いた（ように見えた。だって表情があまり変わらなかったし）

『なんて名前なんだろう・・・』

こんなに気になるなんて・・・もっと近付きたい。

『賑やかな一団が来たな・・・』

不思議な建物から、女性と同じ変な服を着た連中が来た。

『魔王が・・・』

女性の発言に鳥肌が立った。
魔王・・・・か。

『姫を捜せって・・・』

もう確信だった。瓦版にまで載るなんて・・・

『困ったなぁ・・・』

後の彼女らの発言は耳には入って来なかった。

『う～ん。あの女の子と知り合いたいし・・・でもなぁ・・・』

よし！！やっぱり名前とか知りたいし！！行くよ。
僕は、女性の元へ向かった。

『あの・・・』

『なに？』

綺麗で優しい声。聞いてるだけで、心が優しくなる。

『・・・僕、フィルって言います』

僕らしくない。緊張してるなんて・・・

『フィルくんね！！』

僕の名前を女性の側にいた女の子が呼んだ。女性には及ばないが可愛い子だった。明るくて良い子で、友達になれそうな・・・

話しかけられて、ビックリしたけど、本題に入る。

『お、お姉さんの名前は？』

やっと聞けた。まだ心臓がバクバクしている。今の僕の顔は赤いだろうな・・・

『・・・那瀬優妃です』

『那瀬サマ・・・』

あ、そっちで呼んで良かったのかな？どちらが名前なんだろう？僕的には、こっちの方が響きが良いんだけどな・・・

『一緒にいても良いですか？』

『・・・うん』

嫌だったのかな？それとも、性格がこうなのかな？あまり喋るの得意って感じじゃ無いし・・・

とりあえず回想は終わります。

話を戻して・・・僕は驚いてた。訳は、那瀬サマ達は異世界に来てるって言ってたから・・・

僕の住んでるココは那瀬サマ達からしたら異世界なんだ。じゃあ、那瀬サマ達の世界ってどんな感じなんだろう？

「・・・とりあえず説明しますね」

彼らが混乱しないように、僕がなるべく分りやすく説明しなくちゃ・・・

「この世界は、リプールって言います」

「地球みたいなもんかな？」

僕より身長が高い少年、十代くんが言った。

ちきゅう・・・？まぁいいや・・・

「このリプールを統括してるのは、サンド王なんだ」

「サンドって聞くとお腹が空くな・・・」

何故でしょう？お腹が空く名前なのかな？

「・・・もしかしてサンド王の娘が・・・姫ってこと？」

「瓦版に書かれてた姫です・・・言い伝えでは、美しい姫君と言われてます」

そんなに美しいのかな？那瀬サマの方が綺麗なのに・・・

僕の発言に「言い伝え？」と、声を合わせた。

「見た者はいないということです」

まぁ、言い伝えだしね。人の話って大きくなっていくし・・・

「会ってみてーな。魔王が気になるほどだし」

「そんなことありません！！」

「うわっ・・・どうしたんだよ」

あ、僕としたことが・・・なんで焦ったんだろう？

「あと、気になることありますか？」

「・・・魔王ってどんな人ですか？」

今まで黙ってた青年・・・琉川さんが話してきた。

「悪い人ではありませんが・・・・姫君のストーカーって言われてます」

「悪いじゃねーか！！」

十代くんの言うとおりです。悪質ですよ。

「見た事ないのに・・・どうやって捜すの？」

那瀬サマの発言で皆さんは「あっ！」と言った。

確かに、そうですね。案外、魔王もおバカというところでしょうか。

「うぅ・・・会ってみたいよ～」

「・・・いずれ会えるから三月さん」

「そうだ！！」

どうしたんだろう？何か思い付いたようだ。

「フィルくんね。私達を呼び捨てで呼んでにょ！！」

「え、そんな恐れ多い・・・」

「よ～び～す～て～！！」

「わ、分かったけど・・・那瀬サマは無理です」

うぅ、僕の顔赤いよなぁ。恥ずかしいよ。

那瀬サマは「・・・別にいいよ」って許可してくれた。

「こ、これからよろしくお願いします。皆さん」

これから僕の旅はどうなるんだろう？僕の秘密・・・いつかバレるだろうな・・・そしたら、みんな僕を嫌いになっちゃうかな？嘘つきな僕を・・・

荒野との戦い（2）（後書き）

何となく気付いた方はいるでしょう。絶対その人ですから（断言）

荒野との戦い（3）エピローグ

「暑い・・・」
「そうだな・・・」

フィルの発言に賛同した十代。ムキー！私の時は無視だったのに！！

「大丈夫？三月・・・」

やっぱ優しいよ～ナッチャンは・・・癒し系だし～！！
とりあえず私は「大丈夫！」と言った。すると、十代は「馬鹿だからな」と言った。
バカは関係無いじゃん！！

「・・・雲一つ無いから暑いね」
「大丈夫ですか？お嬢」

ナッチャンを心配する琉川。なんか羨ましいなぁ～ナッチャンの役に立てて・・・私だって頑張るもん！！

「近くに噴水の街があるから」
「噴水！？」

フィルの言葉に喜ぶ私。だって涼しいだろうね！！
他のみんなも嬉しそうだなぁ～。

「・・・どんな街？」

ナッチャンがフィルに聞いた。
確かに気になるしね！！
「水が豊かで水上レースとかもあるんだ」
「レース！？」
十代はレースとか好きだもんなぁ。フィルに詰め寄ってる。フィル可哀相だなぁ。
「食べ物も美味しいですし」
「ホント！？」
うへへへ・・・たくさん食べたいなぁ！！
あれっ？なんでナッチャン暗い顔してんだろ？
「どうしました？」
「学校に・・・生徒・・まだ残ってる」
ナッチャンの言葉にみんなは「あっ・・・」と暗くなっちゃった。
暗いの嫌なのになぁ！！
「だったら、王様に頼もうよ！！食べ物送ってくれるかもよ！？」
なんで、みんな驚いてんのさ・・・
「三月にしては考えるじゃねーか」
「失敬な！！」
なんだよ・・・私だって考えてるんだから！！

「でも・・・一般人の私達が会えるわけ・・・」

また、ズーンと暗くなっちゃった。

にゃー、そんなつもり無かったのに・・・

「・・・一応、行ってみましょう」

フィルの言葉に、うなだれてた頭を上げた。

「でも・・・」

「とりあえず今日は泊まりましょう。明日、王様に会いましょう」

強引に決まった。良いのかなぁ？

十代なんて「レースは！？」って言ってたけど「十代だけ残りますか？」と、琉川の発言で首が千切れるかという位振った。

何があるか分らない世界だしね。怖いよ。

みんなで、宿屋に着いた。

魚の絵が描かれてる宿屋・・・ってかホテルかな？

中は水族館みたいだった。魚が気持ち良さそうに泳いでた。

「じゃあ男と女で別れるか」

十代は、パッと決めた。

「あ、あのさ・・・僕一人が良いな」
「まぁ・・・払うのフィルだし・・・いいぞ」
「ありがとう・・・」

どうしたんだろう？なんで一人？
あ、いきなり知らない人と寝るのは嫌だもんね！！

「こちらこそありがとう・・・」

私も、お金のことお礼を言ったよ。ナッチャンは偉いな。みんなより先にお礼を言って・・・
単価だっけ？そういうのが違うんだね・・・

「じゃあ・・・おやすみ」

不安だってあるけどさ、私が暗かったら誰が明るくすんだよってね！！だから絶対私は明るくなる。
みんなの電気になるんだから！！

3話　王都への道（1）プロローグ

「あれ？ナッチャンどこ行くの？」
「・・・散歩」

僕は、部屋でのんびり・・・なんてしてられないけど、書き物をしている。
廊下に人の気配がして書くのを止めた。
「だれ・・・？」
僕は、ソッと扉を開けた。そこには、那瀬サマがいた。
「・・・・どうかしたの？」
「・・・・」
黙ってた那瀬サマを部屋に招入れてお茶を出した。
那瀬サマは飲んで「美味しい」と言ってくれた。自分のじゃないのに、なぜか嬉しかった。
「話・・・って？」

僕は、自分から切り出した。那瀬サマは言い辛そうにしていたから。

「・・・アナタは誰？」

何を言ってるの？僕はフィルだよ。

「じゃあ・・・本当の名前は？」

何を知ってるの？君は・・・どこまで・・・

「言いたくないなら・・・・いいから」

那瀬サマだけには秘密を作りたくないな・・・だから、言うよ？嫌わないで・・・

「僕の正体は――――」

全て話したあと、息を呑む声がした。

ビックリした様子だけど表情は変わらない。

「やっぱり・・・か」

どこまで分ってるの？キミは・・・

「黙ってる・・・みんなには・・・」

「ありがとう・・・」

拒否しないでいてくれたのは嬉しかった。僕の味方・・・本当の味方が出来た気がした。

「ありがとう・・・協力してくれて・・・」

あぁ。あの事か・・・なんか、嬉しいな。那瀬サマにお礼言われるの。やっぱり好きなんだなぁ。

「いつ“出すの”？」

「これから・・・多分間に合うから・・・」

僕達の会話が分らないだろうけど、いつか分るよ。嫌でもね。

だから首を長くして待ってて・・・って、誰に言ってんだ？

「じゃあ着いたらフィルはどうするの？」

初めて名前で呼んでくれた。はぁ・・・幸せだ。三月の気持ちも分るなぁ。

「・・・言い訳作って街を探索するよ」

「・・・うん」

なんか暗い顔になったな。理由が知りたいんだろうな・・・でも、言えないから・・・

今はまだ・・・

王都への道（2）

「おはようございます。お嬢」
「んっ・・・」

例え異世界でも、私の仕事は変わらない。
いつものように、お嬢を起こす。
お嬢の姿に赤くなるが仕事はしなくてはいけない。
なぜ赤くなるかというと・・・

「お願いですから・・・下着だけでも着てください」

お嬢は下着を着けていない。毛布がギリギリ胸を隠してる。
多分下もだろう。

「・・・おはよう琉川」

私は、すぐに三月のところへ行った。

「三月・・・起きてください」
「うにゃ～あと一日・・・」

一日って起きないつもりですか・・・？

「キミに選択肢をあげましょう。一つ目は、今起きるか、二つ目は、眠って置いてかれるか、三つ目は・・・一生眠りに就くか」

最後の部分だけ、できる限り低い声で喋ると・・・

「うにょあーー！！今起きますから殺さないで～！！」

殺しませんよ。でも、起きて良かった。

「おはよう三月・・・」

「おっはよ～ナッチャン！！」

朝から元気ですね三月・・・

お嬢は、着替え終わった様子・・・あれ？服が違う？

「フィルが買ってきてくれたの・・・」

なるほど・・・部屋にあったスーツみたいな物も・・・後でお礼を言わなくては・・・

「さて、行こうか」

お嬢と三月と一緒にロビーに向かった。

「オッス那瀬・・・」

「おはよう那瀬サマ・・・」

フィルと十代は真っ先に挨拶をした。

昔から分ってたけど、お嬢は罪作りな方だ。みんなを惚れさせる。

三月は、相手にされてなくて怒ってた。けど、ちゃんと挨拶されていた。

「洋服ありがとうございます・・・フィル」
「いえ・・・」
私のお礼に気付いたみんなはフィルにお礼をした。
「今日は王都に行くんだよね」
「うん。半日で着きます」
三月の言葉にフィルが答えた。
「ここから船が出るよ。急いで船着き場に行こう」

船着き場に着いた。あまり人がいないんだな。
「・・・切符をお持ちですか？」
「え！？」
マズい。無いのなら行けないんじゃ・・・
「これで、行けますか？」
「こ、これは！！アナタは一体・・・」
フィルが何かを船員に見せた。船員は驚き声を上げた。なんだろう。
「ダメなんですか？」
「い、いえ！！どうぞ！！」

船員の態度が少し変わった？
私達は何とか船内に入れた。

「船なんて久し振りだよぉ！！」
「確かに・・・乗る機会なんて滅多に無いからな」
三月と十代が話してる。私は、仕事柄何度かあるが、一般の大学生だから・・・なのか？

「半日かぁ・・・」
「なげーな・・・」
ぼやき出した三月と十代。確かに半日は・・・

「なら、王都はどんなとこか聞こう？」
お嬢の言葉に賛成して、フィルに聞き出した。

「王都の名は・・・ブランシュ、初代王様が、次に大きい街サランとの戦争に勝ってリプールの主導権を握ったの」
「サランはどうなったんだ？」
歴史書を読むかのように喋るフィルに疑問を聞いた十代。

「今では友好関係で交易とかしてるよ」
「今の王様は何代目なの？」

三月は関係あるのかどうか分らないことを聞いた。

「６８代目だよ」

「けっこう長いね」

確かに長いな。しかも、フィル詳しい。

「戦争とか・・・今は？」

「う～ん。遠い国で、だったらあるけど・・・ここら辺では無いよ。ブランシュが一番、兵力や武力が高いから」

どこにも戦争ってのはあるんだな。妙に悲しいな。

「リプールで一番大きいので、色んな店もあって・・・大道芸とかも楽しくて」

懐かしそうに目を細めたフィル。一体どうしたんだ？

「武器とか必要ねーよな？」

「戦う必要は無いからね」

モンスターとかも出て来ないし、戦うなんてことは無いからな。

「そろそろ着くよ」

窓から外を見ると、港が見えてきた。奥の方に大きなお城がある。現実味が無い。まるで、おとぎ話の中の城だった。

夢の中のようだ。全てが現実を忘れさせる。
今まで当たり前だと思ってたことが否定される。

王都への道（3）エピローグ

「着いたな」
「テーマパークの城みたい～！！」

三月は、俺のセリフに被った。・・・苛立ったから殴った。

「あ、あのさ・・・僕、中に入れないから」

何でだ？聞いても言わないだろうな・・・

「行ってらっしゃい」

那瀬は理由を知ってるみたいだな。聞くつもりは無い。
フィルは、立ち去った。俺達は城の入口に向かった。

「お前達は誰だ！？」

騎士が俺らを立ち塞いだ。物騒だな・・・真剣だ・・・切れ味よさそうだな。

「・・・手紙が届いてると・・・」

は？那瀬・・・何言ってんだ？何を知ってるんだ？

「あぁ・・・貴女が・・・確かに美しい」

は？コイツ・・・那瀬が綺麗なのは分るが・・・

「どうぞ中へ・・・」

全くわけが分らないまま入って行く。
とんとん拍子に王の間についた。
威厳があるな。髭を生やしてるけど・・・

「お前らは、ワシに用があるみたいだな」
「はい・・・」

那瀬は、王が相手なのに普通だ。

「噴水の街の近く・・・私達の仲間がいる・・・保護してくれませんか？」
「・・・」

うっ・・・凄いオーラ、というよりも、プレッシャーが掛かる。

「・・・等価交換だ」
「何でしょう？」

等価交換・・・価値または価値の等しいことを交換する。

「姫の行方が分らないのだ・・・捜してくれないか」
「・・・すみません出来ません」

那瀬？どういう事なんだ？

「どういう事だ？」

王様も同じことを考えたようだ。
珍しく三月も黙ってるから、脱線しなくて済む。

「・・・約束したから」
「・・・そうか。なら良いだろう。他にもあるんだ」

約束？いつの間にしてんだ？王様も、やけにあっさりしてるし・・・
・
「“運命の翡翠”を探してほしいのだ」

「運命の翡翠？」と、みんなで口を合わせた。運命の翡翠って・・・
・宝石だよな？

「本来なら息子・・・王子が探しに行くのが試練なのだが・・・」
「・・・息子でなく娘だった」
「そうだ。それに・・・姫も行方不明になってしまって・・・」

王子でなく姫だったから、宝石を探すという試練を受けることが
出来なかったのか。
でも、姫でも護衛を付ければ取りに行けたんじゃないか？

「たぶん、代々・・・男じゃないといけなかったんだ」
「そうだ・・・」

掟ってわけか・・・厳しいもんだな・・・王族ってのも・・・
那瀬、詳しいな。やっぱり財閥の娘ってのも理由なのか？

「・・・どこにあるのですか？」

ずっと黙ってた琉川が聞いた。これを知らなかったら探しに行けないし。

「場所は、異端なる台地だ」

「“異端なる台地”ってなに？」

三月は頭を振りながら聞いた。俺も分からなかった。いや、たぶん琉川も那瀬も・・・

「ここから東の嵐が吹いてる誰も近付けない台地だ」

「誰も近付けないのに行けるの？」

おい三月。相手は王様だぞ・・・ヤバくねーか？

王様は震えてる。怒ってんのか？

「はーっははっはは！！面白い娘じゃ・・・姫とは仲良くなれそうだ」

「そうっすか？」

だから、喋り方気をつけろよ・・・

「ねぇ・・・異端って何？」

「異端ってのは・・・正統と考えられてる思想・信仰などから外れている事。また、その説」

やっぱ頭良いな那瀬。辞典で調べたようなセリフだったし・・・生き字引ってところか？

俺も知らなかったけど知ってるフリしてたし・・・

「台地って大地と、どう違うの？」

「大地は、広く大きい土地です」

「台地は、周囲より一段と高く表面が広く平らな土地って意味」

琉川も頭良いんだな。羨ましいぜ。俺も協力出来たらカッコいいだろうな。

「だけど、台地にあんのか？翡翠なんて」

俺は、他のことを考えてた。

那瀬も頷いて考えるポーズをしてる。可愛いな。

「普通じゃない台地ってことだよね？」

「そうね。嵐ってのも考えると普通じゃ通れないわ・・・三月」

普通のＲＰＧだったら重要なアイテムとか手に入れるだろうな。

「嵐か・・・竜巻ってとこだろ」

「砂埃凄いよね？きっと・・・」

完全防備で行かなきゃいけねーな。助けるためとはいえ、面倒なことになった。

「街の人に聞いてみましょう」

琉川の一言でみんな頷いて、帰ろうとした。

「娘を頼む。地下に宝箱がある好きに使うが良い」

どこまでＲＰＧでいくんだよ。地下に宝箱って、なんかレアな武器とかアイテムとかあれば良いのにな・・・・

わけが分らないことばかりだ。
那瀬なら全て知ってるんだろうな。
いつになったら教えてくれるんだろうか・・・全てを・・・

4話　偉大なる台地（1）プロローグ

「那瀬サマ達・・・大丈夫かなぁ？」

僕は、公園でのんびりとしてる。

「フィル～～！！」

あ、三月だ。

こっちに向かって走って来た。

「あのね！！異端なる台地に行くんだって！」

え・・・

まさか、アレを取りに行かなきゃダメなの？

「場所分かる？」

「分るけど・・・嵐を止めるオカリナが必要なんだよ？」

僕の言葉に十代は「レアアイテムはオカリナだったかぁ」って、言ってた。どういう意味かな？

「どこにあるの？」

那瀬サマは、十代の発言を無視して答えた。

「えっと・・・」

どこだっけ？
小さい頃に聞いたっきりだから忘れちゃったよ。
みんな、ハテナマークを頭に浮かべてる。
僕が浮かべたいよ！！

「あ、オババ！！」

みんなで声を合わせて「オババ？」と言った。

「占いが得意で魔女って言われてる人・・・確か、その人が持ってた」
「じゃあ行こうよぉ！！」

三月は、手を上下に動かしながら言った。
でも・・・

「オババは人が嫌いなんだよ」
「じゃあ、どうすんだよ？」

うん。十代の言うとおり。だけど、僕に考えがあるんだ。

「僕と那瀬サマで行くよ」
「なんでだ？」
「愚問だね。僕は、オババと知り合いだし、那瀬サマだったら気に入れられる」

僕の言葉に「私も～」と、三月が言ったが「殴るぞテメー」と、殴った。それに「もう殴ってんじゃんか～！！」と、涙目で言った。

「では、フィル・・・お嬢をお願いします」

やっぱり琉川は、大人だなぁ。冷静だし・・・
僕は「任せてよ」と、了承した。

相変わらず恐い屋敷だ。蔦が絡まってて、恐怖の館・・・

「お化け屋敷みたい」

那瀬サマの発言は、分からなかったけど、何となくピッタリな言葉だった。

「オババ〜〜?」
「お主―――」
「えへへ・・・あのさ、オカリナ貸して?」

自分の不利になる発言を遮って必要な事だけを話した。
オババは驚いた顔をして、席を立った。
オババ・・・昔と変わって無いなぁ・・・
シワだらけだったし、身長だって小さいし・・・クシャクシャだった。

「クシャクシャで悪かったの」
「ビックリしたぁ。心読まないでよ」

昔から変わらない。この性格は・・・
小さい頃は、本当の魔女だって思ってた。

「そういや、その娘は？」

那瀬サマを見て不思議に思ってた。

「私は那瀬優妃です」

「はて？珍しい名前じゃな」

うん。僕も思ってた。でも、可愛いし・・・良いかなぁって。

「あの・・・」

「オババで良い」

那瀬サマは、何て呼べば良いか分らない様子だった。

また、その姿が愛くるしく可愛かった。

「ふむ・・・那瀬とやら、ワシは主を気に入ったぞ」

「ありがとうございます」

僕が気に入ったんだもん。当たり前でしょ！！

「それで、オカリナをどうすれば・・・」

「必要な人物が吹けば、おのずと道は開かれるだろう」

やっぱりかぁ。どうする事も出来ないってわけだね。

オババは、オカリナを那瀬サマに渡した。僕じゃ頼りないってこと？

「みんな待ってるから行こうか」

那瀬サマが言った。もっと居たかったな。

那瀬サマは「また来ます」って、言ったから仕方が無いや。
僕達は、オババに挨拶をしてから、みんなの元に向かった。

「あ、ナッチャン〜〜フィル〜〜！！」

手を振ってる三月。
僕の名前も呼んでくれて嬉しかった。

これから、僕の正体を明かすんだ。
例え、分っても・・・嫌わないでくれるかな？

偉大なる台地（2）

「ふぅ～」

一時間ほど歩いたよぉ。疲れたぁ。

「体力不足だ」

十代みたいに体力バカじゃないもん！！

ナッチャンも琉川もフィルも普通の表情だ。

なんか、私だけ・・・置いてけぼり？

「大丈夫？三月」

うにゃあ、なんで？ナッチャンは、毎朝リムジンのお迎えだから私より無いと思ってた。

「お嬢は毎日運動してますから」

そうでした。お金持ちだから、運動するスペースが沢山あるんだよね。

「あそこに見えるのが、異端なる台地です」

やっと～～着いたぁ。

もう歩きたくない～～。

「ここで待ってるか？」

十代が笑いながら言った。
嫌に決まってんじゃん！！モンスターいなくても、怖いもん！！
「オカリナをどうするんです？」
琉川が言った。完ぺき敬語じゃなかったよね？深く考えない方が身のためか。
オカリナのこと知ってるのは、オババの家に行った二人だけ。
「必要な人物が吹けば、おのずと道は開かれる・・・」
ナッチャンは言った。なんか、物々しい言い方だなぁ。オババってのが言ったのかな？
「誰だよ・・・必要な人物って・・・」
私だったら面白いだろうけど、違うだしね～～！！
「フィル・・・」
「う、うん・・・」
ナッチャンの言葉に頷いたフィル。
一歩前に出て、オカリナを吹いた。
「オカリナって悲しいよね？」
私の言葉に頷いた十代。寂しいって感じがするんだよね。
一定のリズム・・・間違いなんて一度も無い。
不思議に思った。懐かしい音楽だったし、フィルが何でオカリナ

が吹けるのか・・・

「聞いたこと無い？この曲・・・」

「あぁ・・・ガキの頃に・・・」

やっぱり・・・十代も思ったみたいだ。

でも、ナッチャンも琉川も分らないって顔だった。

「！？」

竜巻に龍が巻き付いた。

詳しく言うと、龍の形した風が、竜巻にグルグルと巻いた。

その風は、フィルが吹いてるオカリナから出てるものだった。

風は、私達を叩き付けるように当たりながら竜巻を消していく。

私を十代が、ナッチャンを琉川が支えた。

フィルは、髪を揺らしながらも、自身は動かない。まだオカリナを吹いている。

そして、風が止んだ。目を開けると、台地の上に土台があり、その上に宝箱があった。

竜巻も龍もいなかったのに驚いた。

十代は、私から離れて宝箱に近付いた。

「うわっ！！」

バチっと静電気みたいなのが走った。

みんな、心配して十代の名前を叫んだ。

「結界？」

普通に話してる十代にホッとしたみんな。

『我に近付ける者は、ただ一人だけ・・・』

突如聞こえてきた声に驚いた。
あまりの低い声に、お腹まで響く。ズシッとした低重音に鳥肌が立った。
怖くて声を出すどころか、口を開くことも出来ない。

「・・・近付けるのは誰？」

その空気を断ち切るように、凛とした声が響く。みんな、その声に意識が戻ったようだ。
ナッチャンの声だった。

『我に近付けるのは・・・・王族のみ』

また低い声に意識が遠のきそうだ。
それよりも、王族のみって・・・手に入れられないじゃん！！
私と十代は、ショックを受けた。

「フィル・・・」

ナッチャンは、フィルの名前を呼んだ。
何でかな？

私は、知らなかった。知ろうとしなかったんだ
ヒントがあったのに・・・ナッチャンは気付いてたのに・・・

偉大なる台地（3）エピローグ

「・・・」

「大丈夫よ・・・フィル」

僕が迷ってると那瀬サマは、僕の手を握って話した。

「みんな、悪い子じゃないから・・・優しいから大丈夫」

那瀬サマは優しい表情で話した。

おかげで勇気が出た。

『ん？お主は・・・』

「はい・・・僕・・・いえ・・・私は、ブランシュ王国サンド王の娘・・・リフィルです」

僕の言葉に驚いたみんな。

「フィル・・・」

嫌われた？怖い・・・

「凄いねー！！お姫様だったんだ！！」

僕の手を握って喜んでる三月。嫌ってない？

「三月・・・話はあと、宝石を・・・」

うん。僕は宝箱に近付いた。

『お主は、掟を知ってるか？』

「はい。先祖代々男が来てました。でも、私は女です」

ダメかもしれない。だけど、僕は、気分爽快だった。だって、僕を嫌いって言わなかった。

本当の友達が出来たから・・・

『掟というのは破るためにあるもの・・・』

はい？そんなこと言って良いの？

クスッと声がして見ると、那瀬サマが笑ってた。声だけ・・・表情は変わって無い。

「そうね。いつまでも、こだわってはいけない」

『ふむ。お主とは話が合いそうじゃ』

気に入られた那瀬サマ。凄いなぁ神様さえも惚れさせるなんて・・・

・

『昔から女は強いからのぉ』

確かに、父様は尻に敷かれてるものね。

ん？まさか、この神様も？

『フォッフォフォ・・・では、運命の翡翠を持ってくが良い』

変な笑い方をしたあと声がしなくなった。

消える前に「サンドによろしくな」と、言っていた。

よろしく？知ってたのかな？
「じゃあ帰りましょうか」
「・・・う、うん」
「フィル・・・貴女も行くのよ？」
うっ・・・やっぱり帰らなきゃダメ？
嫌なのになぁ。

き、緊張する。だって、何年ぶりに帰って来たんだもんね。
「姫！！」
門番が、僕を呼んだ。久し振りだなぁ。
「お父様に会いますので面会を・・・」
「どうぞ！！」
王の間に入った。全く変わって無いなぁ。
「リフィル！！」
「・・・ただいま帰りました」
ホントは嫌なんだけどね！！那瀬サマのためだし・・・
「運命の翡翠と姫を連れて来た」

那瀬サマ？

「親子の関係だけは切り離せませんから・・・何が理由でも・・・離れちゃダメなんだよ・・・フィル」

「・・・」

なんで寂しそうに言うの？那瀬サマは何にも悪くないのに・・・

「何があっても、ここは貴女の家・・・帰るのが当たり前なのよ」

僕の家、かぁ・・・例えどこにいても、家が恋しいんだよなぁ。

「でもでも！なんで・・・ふぃ・・リフィル様が家出なんて！？」

「フィルで良いです三月・・・理由は・・・」

「言いたくないなら言わないで良い。根掘り葉掘り聞くなんて失礼よ・・・三月」

那瀬サマは大人だぁ。正直、言うの戸惑った。

「そっか・・・ゴメンね」

「ううん・・・」

三月は優しい子だね。勘違いされやすいけど。

「うむ・・・確か、噴水の街の近くだったな」

「はい・・・」

「そこのお前・・・食料を先程の場所へ！！」

父様は近くにいた兵士に命令した。兵士は「はっ」と、従った。

「良かったね～」
「ホントにな」

那瀬サマの仲間達の食糧確保は大丈夫として、那瀬サマ達はどうするのかな？

「これからどうすんの～？」
「・・・う～ん」

三月は、僕と同じ事を考え、十代は悩んでる。

「魔王に会ってみたいな」

え！？那瀬サマぁぁあ！！
アイツに会いたいのぉ！？

「そういえば魔王ってフィルを捜してたんだよね？」

三月の、ふと言った言葉に「あっ・・・」と、みんな言った。

「どうして魔王が？」
「なるほどね・・・」

ギクッとした。那瀬サマって勘が良いんだなぁ。

「何がなるほどなの？」
「そういや、琉川って知ってたのか？」

三月の発言を無視して琉川に聞いた十代。

知ってたって・・・？

「薄々です。魔王に対しての発言だったり、知識が良過ぎで、王宮に入らなかったのが決め手です」

うひゃあ。琉川も勘が良いんだ・・・

「もうぅ！！十代のせいで話が逸れたぁ！！」

「いつも話を逸らしてるテメーに言われたくねーな」

口喧嘩し合ってる。ダメだよ。

「恋人同士？」

僕の一言に、真っ赤になりながら否定した。息がピッタリ。

「私は！ナッチャンが好きなの！！」

「俺だって那瀬・・・が・・・」

最後の部分は小さくなってた。

でも、僕には聞こえた。「好きだ」って・・・

みんな那瀬サマが好きなんだなぁ。

良いなぁ・・・

いつか帰るんだよね？そうしたら、那瀬サマや三月と遊べないの？

寂しいな・・・

5話　魔王と姫（1）プロローグ

「やっぱ会うの～？」

フィルは、少し抵抗あるみたいだ。何故かは知らないが・・・。

「うぅ・・・」

「ストーカーなのが嫌なの？」

そういえば、フィルが言ってたな・・・『悪い人ではありませんが・・・・・・姫君のストーカーって言われてます』って・・・。

「会いたくないのは分るけど・・・」

「別に会いたくないわけじゃないんです！！」

私の後ろに立ってた十代と三月の「うひゃーツンデレか？」と声がしたが、無視をした。

「僕だって会いたいです」

「・・・フィル」

お嬢は寂しそうな表情をした。

フィルは、いつまでも一人称そのままでいるのか？

「魔王の家ってどこ？」

「行きてー！！」

三月と十代は行く気満々・・・。

フィルは、微妙。お嬢は普通。じゃあ私は？

「話し合ってみませんか？」

とりあえずは話し合い優先。特に考えたくないけど・・・。

「ってことで行きましょう！！」

三月の合図で、王宮を出た。

「どのくらい掛かるの？」

王宮を出た途端、言い出した三月。

「近くに飛行船があるから・・・それで行きましょう」

顔色が悪いまま話したフィル。それを心配するお嬢。

「飛行船！？」

「楽しみだぜ！！」

空気を読まないバカ二人。ため息吐いてしまう。

「リフィル様・・・あの方の元へですか？」

「お願いします」

運転手らしき人物が声を掛けてきた。それに頷いたフィル。
それぞれ飛行船に乗り好きな場所に座った。
私はお嬢の隣り。何があってもお守り出来るから。

「ねぇ・・・フィル」

お嬢の隣り、私の反対に座ってるフィルに話し掛けたお嬢。「ん～」と、無気力で話す。

「ストーカーの割に何もしてこなかったね。私達、外にずっといたのに・・・」

確かに、ストーカーなら追いかけて来るはず。でも何もしてないし、怪しい奴もいなかった。

「昔は、嫌ってほどウザかった」

三月達が静かだなと思ってたら窓の外を見てた。数分前に飛び立ったから、結構高い所にいるだろう。私の背後に山が見える。地球でいうアルプス山脈ってとこだろう。それなりに大きい。

「だから怒ってるのかも・・・急にいなくなったから」
「貴女と魔王は愛し合ってるんだね」

フィルの言葉に考えて答えたお嬢。
フィルは「でも、那瀬サマも好き」と、言った。私には聞こえたが、お嬢は聞き取れなかったみたいだ。

「・・・あ、着くね」

外を見ると、普通の魔王城と違って一軒家。でも、一軒家でも大きい。那瀬家よりは小さいが、ドーム何個分だろうか・・・。

「でけーな」

「うん。化け物城だねぇ」

何語だよ。化け物城って・・・。

飛行船から降りて、入口を見た。洋風の屋敷に相応しい扉だった。

「こっちから入るよ」

なぜか裏口から入ってくフィル。

裏口は、入口よりも地味で、雑草も生えてて手入れがあまりされてない。

裏口のドアに着くと、何年か昔のドアで、防犯は良くないんじゃないかって位、古臭い。

「手抜き？」

「ふふっ、どうでしょう？」

三月の言葉をはぐらかしたフィル。

少し女性っぽくなったな。前は、男装ってわけじゃないけど男っぽくしてたから。

「姫・・・。魔王様が心配なさってましたよ」

入口にいた男が話し掛けてきた。

魔王の家来のわりに、普通の人間だ。悪魔っぽくないし、魔導師ってのも無い。

「では、こちらに・・・」

私達を怪しむ様子はない。どうやら知ってたみたいだな。お嬢も気付いてた。

一応、私だけでも警戒はしておこう。

「久し振りだな・・・」

やっぱり、魔王のわりに普通の人間だ。

容姿は、今時の若者って風で、綺麗な藍色の瞳に金髪だ。

普通だったらカッコいい分類に入るだろう。

「カッコいいね」

「ストーカーなのにな・・・」

三月もカッコいいって思った様子だ。十代は少し怒ってるかも。

「ごめんなさい・・・」

「いや、良いんだ・・・」

ん?良い奴じゃないか?怒らないなんて・・・。

「可愛い子を連れて来てくれたしな」

前言撤回・・・。ムカつく奴だ。お嬢に近付く奴全員排除。

「・・・ライゴ？」

魔王の名はライゴって名前みたいだ。
この世界の名前って珍しいな・・・。

「俺の嫁にならないか？」

お嬢の顎を持ち上げるライゴ。
うん。潰す。

「それは私にじゃなく、フィルに言いなさい」

無表情で、ライゴの手をはたいた。
ライゴは、はたかれた手を見つめる。

「珍しい女だ。俺を拒否するか・・・」
「違う・・・。フィルをどう思ってる？」
「・・・お前が嫁になれば愛人にしてやる。それなら良いだろう」

三月や十代は怒った。でも、ライゴは聞いてない。

「ふざけるな・・・」

パチンと景気の良い音が響く。周りの魔王の配下は殺気を出した。

「お前っ・・・」
「アンタ・・・今までフィルを愛してたのに・・・心変わり？最低よっ！！」

珍しくキレてるお嬢。表情は変わって無いから、更に恐い。
ライゴは、お嬢に怯えた。

「確かに、お嬢は美しいですが、別の人に心変わりするなんて同じ男として許せませんね」
「・・・っ」

分が悪いのか、黙るライゴ。

「まぁ、フィルも人のこと言えませんしね」
「どういう事だ？リフィル」

私の言葉に焦るライゴ。フィルは「っ・・・」と、顔を歪ませた。

「他に男がいるのか？」
「何です？その言い方。貴方は自分のことは棚に上げるんですか。自己満足も大概にしてください」
「なっ・・・」

何です？まだ何かあるんですか？

「テメーだって他に可愛い子がいたら目移りすんだろ！！」
「馬鹿ですか？本当に愛してんならしないでしょう・・・やはりバカだね。あの瓦版のことでも思ってましたがバカですね」
「バカバカ言うな！！しかも途中敬語じゃなかったぞ！！」

ツッコムところは、そこなのか？やっぱりバカですね。

「なんか、琉川・・・怖いね～」
「あぁ。あんま怒らせねーようにしようぜ」

背後のバカコンビはシカトします。いちいち構ってられないし。

「・・・琉川！！もう良いよ。私が悪かったの・・・」

一人称変ったな。

でも、女性を悲しませるのは紳士としていけないね。

「バカが女性を泣かすなんて・・・」

「だから！！」

「私、もう会わないから・・・」

私の言葉にツッコミをいれようとしたが、フィルが遮った。

フィルは、目に涙を浮かべ走り去った。

みんなは、フィルの名を叫んだ。だけど、立ち止まんなかった。

「最低だなお前。ここに来るの嫌がってたのに、我慢して来たのに・・・そんな言い方ねーよ」

「そうだよ。フィルはアンタをどんだけ好きだったか分ってる？」

十代と三月は、ライゴに叫んでフィルを追いかけてった。

「・・・俺」

「アナタ・・・何を隠してるの？」

「え・・・」

また気付いたんだ。昔から、人の感情には敏感だったから。

まだ帰ることは出来ないんだろうな。
でも、別れってのは嫌なもんだな。

魔王と姫（2）

「アナタ・・・何を隠してるの？」
「え・・・」

なんで、俺の感情が分ったんだ？

「魔王ってのと・・・人間の姿と関係あるの？」

どこまで分ってるんだ？

「・・・裏歴史ってのがあるんだ」

真実を知ったら、コイツらはどうなっかな？

「・・・世の中には、表沙汰にならない歴史がある。それが裏歴史でしょ？」

本当にコイツ、何なんだ？詳しすぎる。

「まぁ、それだけじゃないんだ」
「人の姿をしてるが・・・実は違うとか？」

この男も、侮れない。グサッと真実に切り入ってく。

「あぁ。お前らは知ってるだろ？歴史を・・・」

「ブランシュ王国の初代王様がリプールの主導権を握った・・・っての」

記憶力は良いな。話してて楽だ。

「本当の最初は・・・俺の祖父だ」

「そりゃあ、いきなり主導権なんて握るなんておかしいものね」

薄々気付いてるな・・・コイツら。

「契約ってところかしら？」

「あぁ。俺らは魔族だからな」

主導権を渡す代わりに、女を貰う。

「でも、あっさりと引いたわね」

「・・・当時の魔王は、ある女を愛してたんだ」

その女を貰うために・・・。

「なるほど、ついでに戦争の手伝いをして、しかもリプールに手を出すなって条件もあったんですね」

「そうだ」

簡単に手放したから、他の魔族と争ったらしいが・・・結局は、魔族も人間の女に惚れたしな。

「でも、それと・・・フィルとの関係は？」

あぁ。それだけなら問題は無い。

「俺が愛してしまったのは・・・姫だったから」
「今まで普通の人間だった・・・。それなのに、姫だったから・・・関与してしまう」

女・・・確か那瀬って言ったか？勘が良過ぎて人間に見えねー。
琉川って男も、冷徹だし。

「じゃあ、さっきのは演技だったわけ？」
「いや・・・本音だ」
「・・・・いい加減にしないと潰しますよ？」

なるほどな。琉川ってのも、さっきリフィルを追いかけた奴等も那瀬ってのが好きなんだな。

「リフィルの好きな奴は？」
「知ったらどうするの？」
「・・・さあ？」

生かしておけないが・・・。
俺に許可なく好きになったのなら・・・許さねー。

「・・・鈍感ね」

は？那瀬・・・何言ってんだ？
この俺様が鈍感なわけねーだろ。

「お嬢ですよ」

なにが？琉川・・・説明足りねーよ。もし、俺の部下だったら、

クビだぞ。

「フィルの好きな人・・・お嬢です」

なっ・・・。

まぁ、那瀬なら分らねーでもねーか。綺麗だし。

でも、女がライバルってのも有り得ないことだな・・・。

「どうでも良いけど、フィルはアンタを好きだったのよ？」

嘘だ・・・。だって俺から逃げたし・・・。

「逃げた理由はストーカーでしょ」

何にも言えねー。俺のせいだったか。

「ホント自業自得。バカのくせに、ろくに考えず突っ切るから」

言い返せない。俺が不甲斐ないから・・・。

「青二才でも構わない。ちゃんと話さないと分らないから」

那瀬は、凛とした表情で言った。

「連れて来たにょ～」

気の抜けた声を出してやってきた。

「難しいことは抜きに・・・とりあえずアナタの感情を言ってみたら？」

覚悟は決めた。
リフィルは、女の子に連れられて来た。嫌そうに、俺から顔を逸らす。
俺の責任だから・・・。
「リフィル・・・」
女の子が手を放した。その隙に逃げようとしたが「聞きなさい！！」と、那瀬の言葉に立ち止まった。
俺は、リフィルの元へ行き、腕を掴み俺の方へ向かい合わせた。
「聞いてくれ・・・」
「・・・うん」
最初は抵抗してた。ショックを受けたが、次第に力が抜け抵抗を止めた。
「怖かったんだ・・・魔族の俺が・・・姫を汚してしまうことを」
「バカ・・・」
「あぁ、俺はバカだ。好きなのにリフィルを傷つけると分ったら手放すなんて・・・」
ごめんな。もっと、俺がキミの事を分ってたら、こんな事にはならなかったよな？
「本当にっ・・・私っ・・・待って・・・それなのにっ・・・」
ごめん。二度も泣かせてしまって・・・。
いや、何度も泣かしてしまったんだろう。

キミの言いたいことは、俺には分るから。他の誰が分らなくても、俺だけは・・・。

「一件落着？」
「そうだな・・・」

女の子と男が話し合ってたのを、遠くに聞きながら、俺はリフィルを抱き締めてた。

何度お礼を言っても足りないほど・・・。
こんな日が来るなんて思わなかったんだ。

魔王と姫（3）エピローグ

「幸せだからってまだ抱き合ってんの？」

羨ましいぜ。俺も那瀬と・・・・。

二時間位あのままだし・・・・。

「よく飽きないな・・・・」

琉川も呆れてるし・・・・。確かに呆れる。何を考えてんだ？

「・・・帰ろう？取り敢えず学校に」

え！？学校・・・・。ってことは、先公に怒られるだろうな・・・・

言い訳考えなくちゃな。

「那瀬サマ・・・帰っちゃうの？」

フィルは悲しそうに那瀬を見る。

別れってのは、いつも思うが嫌だな。

「・・・帰るって言っても元の世界に帰るわけじゃないから」

那瀬はフィルに優しく話す。

「飛行船で、学校に連れて行ってくれない？」

「・・・・う、うん」

辛そうに頷くフィル。分るけどな。サヨナラなんて、言いたくないし。
でも、まだ帰るなんて分らないし。

「見えてきたな・・・」
「でけーな。アレってなんだ？」
魔王、ライゴが那瀬に聞く。気安く話してんじゃね～よ！！
「あれは勉強するための施設ね」
「・・・なあリフィル。俺らの国にも作らねーか？」
ふと言ったライゴに「何を勉強するの？」と、言った。
「真実だ。魔族ってのもいるんだって・・・」
「いつか、人間と魔族と一緒っての当たり前になる日が来るわ」
俺も那瀬と同じ事考えてた。同じヒトなんだから。分り会えるさ。
「契約なんて必要無い世界になれば良いわ」
「そうだな・・・」
まだ辛そうなフィル。確かに、契約なんて言葉が無くなれば、みんな幸せなんだろうな。

「・・・降りるね」

飛行船は、荒野に降り立った。
校門に着くと、那瀬は言い出した。

「ちゃんと向き合ってね。真実と想いに」
「うん。分ってるよ。裏歴史なんて物が無くなるように頑張るよ」

那瀬とフィルは握手よりも強く握り合ってる。

「また会おうよ！！」
「でもっ！！会えるかな？」

三月の言葉にフィルは悲しげに言った。
それでも、三月は叫んだ。

「会えないって思ったら、それが最後だよ！！会えるって思ったら会えるんだもん！！」

たぶん言ってる意味は分って無いだろうな。
三月は昔から、こうだったな。
幼稚園からの幼馴染みの女の子と別れる時も言ってた。
アイツが言うとその通りになる。
高校生になったら再会したもんな。

「三月・・・」
「会えるんだから・・・」

あ～あ。泣きじゃくって・・・。

「うん。会えるわ。学校でトリップじゃなくってね」

那瀬の言葉に笑う皆。

那瀬は無表情だったけど、穏やかだ。

分かってた未来だけどさ、辛いよな？

いつか、那瀬と別れる時がきたら同じ事言ってくれるか？

6話　別れと出会い（1）プロローグ

「さて、先公に会いに行かなくちゃな」

十代が言った。ひぇーー！！先生に怒られる！！

「じゃあ・・・リフィル」

「うん・・・また来てね」

ナッチャンの声に泣きそうに言ったフィル。

「三月も・・・来てね」

「約束！！」

小指と小指を繋いで約束した。

また、貴女に会えますように・・・と。

「あれっ？」

「地震だな・・・」

まただ、あの～恐い地震だよ～～！！

「震度６くらいだよな？」

「えぇ・・・」

琉川はナッチャンを支えながら十代に答える。

「学校入った途端に・・・なんて」

「そうだな・・・」

玄関がグラグラする。頭もフラフラする。

「っ・・・治まったな」

「あぁ・・・外を見ろ」

琉川の発言にみんなは外を見た。すると・・・。

「あ、戻って来たな・・・」

元の世界に戻ったんだ。良かったぁぁ！！

「私、みんなに知らせてくるねー！！」

「私、帰るわ」

「お送りします」

ナッチャンは帰ると言ったら、琉川は言った。

「またリムジンかぁ」

良いなぁ。私も乗ってみたいなぁ！！

「十代は？」
「俺も行くよ・・・友達残ってるから」
私と十代は体育館に向かった。

「那瀬様は～～？」
私達が入ったら、すぐに囲まれた。
「帰っちゃったよ？」
私が言うと「ご飯のお礼言えなかった～」って、言ってた。私だって頑張ってたんだよ～！！あれ？頑張ったかな？
十代は友達を見付けて、さっさと帰った。裏切り者～～！！
「あ、みんな！！元の世界に帰って来たよ！！」
私の言葉に皆は興奮した。そして、足早に出てった。
「良かった良かった！！」
本当に良かったね！！

長かったなぁ・・・。たった数日だけどさ、なんか数ヶ月って感じだった。

私は未だ、まだある彼女の苦悩に気付かなかったんだ。
でも、私にライバルが現れるなんて考えて無かったんだよなぁ！！

別れと出会い（2）（前書き）

これに、出てくる新キャラは、いずれオリジナルの小説を作るつもりです

別れと出会い（2）

初めまして、ボクは乃天(のあ)って言います。
趣味は戦闘・・・戦う事が生き甲斐です。
今日、ボクにとって人生を変える出会いがあった。
彼女のためなら、命を懸けて守ってみせる。

「降ろして琉川・・・」

琉川と呼ばれた男は、リムジンの扉を開けてあげた。
リムジンから降りたのは、絶世の美女だった。
同性なのに、ドキドキしてる。

「ちょっと散歩したいわ」
「お一人で大丈夫ですか？」
「えぇ・・・」

どうやら、お嬢様のようだ。リムジンは、走り去った。彼女は一人リムジンの後を目で追った。

「どちら？」
「ボクは、乃天」
「ノアね・・・」

ボクの名前を呼んだ。心臓がドキドキした。

「私は那瀬優妃よ」

なるほど、那瀬財閥の御令嬢だったんだね。
「ねぇ、キミは強い？」
「いえ・・・残念ながら戦えないわ」
残念だね。戦えたら、ボクの血が騒ぐのに。
でも、お姫様はボクが守るよ。

「っ・・・」
「那瀬！！」

フラッと倒れた那瀬を支えたボク。
ボクよりも小さいんだな。小柄だし・・・。強く握ったら壊れそう。
貧血かな？

「あれ・・・・目の前・・・・が・・・・」

暗くなった。
ボクは貧血なんて、今まで無かったのに・・・
倒れたはずなのに、地面に触れた感触は無かった。

「ノア・・・！！」
「んっ・・・・」

目を覚ますと那瀬の顔アップ。これほどの幸せは無いだろうね。

「ここは？」
「分らないわ」
どういう事だろう？那瀬がボクを運んだってわけでもないだろうしね。
「ノア？」
「宿みたいだね」
那瀬はボクを心配してたけど、ボクは周りを見た。
那瀬を守れるのはボクだけ。だから、ボクが守るよ。
「木の造りだから、近場には無いわ」
そう。倒れた近場にはホテルなんて無かったし、宿屋も木製のところなんて無かった。
だから、知らない場所なんだと思い警戒する。
「まさか・・・またかしら？」
ボクが「また？」と、聞くと答えてくれた。
「今日・・・か、どうか分らないけどね異世界に行っちゃったの」
信じられないけど、那瀬が嘘を吐くような子じゃないし、こんな嘘を吐いても得はしない。

わけが分らないよ。どうすれば良いかも分らない。
でも、これだけは言える。那瀬に手を出す奴はボクが、ブっ飛ばす。

別れと出会い（3）エピローグ

「妙にイラッとくるね」

いい加減ベットに座ってるのも飽きたので部屋を出ると、誰もいなかった。

普通なら、ロビーに人がいてもおかしくないのに・・・。

で、なぜボクが怒ったのかというと、看板に『ここに泊まればアナタもハッピー。私もハッピー。お店もハッピー。さぁ一緒にハッピを着ましょう！！』と、書いてあったから。

店の名前は？と気になったけどスルー。

「なんか騒がしいね」

どこからか出した眼鏡を懸けた那瀬。

似合うけど、可愛いって感じはしない。

多分、初めて会った人は惚れないだろう。

「視力悪いの？」

「ううん。人避け」

なるほど、効果はあるみたいだね。伊達眼鏡ってとこなんだ。

「見るからに悪そうな人・・・」

窓の外を見てた那瀬は言った。ボクも見たら、見るからに悪そうな人達が村人らしき人を捕まえてる。

「助けなきゃ・・・」
「ボクが行くから、ここにいて」
那瀬を残そうとしたが、悲しげにボクを見る。
でも、負けちゃダメだ。
「ボクは強いから大丈夫だよ」
「・・・うん」
頷いた那瀬を置いて、ボクは武器を持って悪い奴等のもとに向かった。
「誰だテメー！！」
「キミに名乗る名前は無いよ」
ボクは武器を構えた。
「ヌンチャクだと！？」
そう。ボクの武器はヌンチャク。
まぁ、もう一つあって鉄扇（てっせん・・・鉄で出来た扇子）なんだけど、ヌンチャクは、鉄よりも硬く軽い。当たれば、骨は砕けれるだろうね。
「とりあえず寝てくれない？」
なんか面倒になってきたから、さっさと倒す。
サッと背後に回る。男が振り向いた瞬間に頬をヌンチャクで殴った。

「ぐはっ！」

勢いが良かったのか、壁にぶつかり穴が開いた。

「穴・・・開いちゃったね。別に良いけど・・・まだまだ足りない。ボクを楽しませてよ」

自分でも分るほどニヤッと笑っている。妖笑ってところだろう。

周りは、そんなボクにゾクッとしたようだ。

ボクは、カンフー映画みたいにヌンチャクを振り回す。

男は起き上がりナイフを構えた。

「まだ、抗ってくれるんだね。とことん潰させて貰うよ？」

ヌンチャクでナイフを払った。飛んだナイフは壁に突き刺さった。

「お、おお・・・お願いだ・・・助けて・・・ください」

男は、土下座で命乞いをした。なんて、みっともないんだろう。

「・・・・分った」

ホッとした男の顎に本気で殴った。

「つまらない人間は必要無いよ。必要なのはボクを楽しませてくれる子と、無条件で那瀬だけ」

卑怯って言うならボクが潰させて貰うよ。

この世はボクだけで良いんだから。

那瀬もボクの物だから奪う奴は、滅多打ち・・・。

掟はボクが作るんだから邪魔はさせない。

7話　世界の不純（1）プロローグ

「異世界ねぇ・・・」
「信じられない？」

だって、有り得ないでしょ・・・。外見なきゃね。
どっかの田舎みたいに道路が舗装されていないし・・・。

「そういえばノアって女の子？」

いきなりかい？ボクだって、考え事あったのに・・・。

「確かに、声も低いし髪も短いし、胸だって那瀬みたいに豊満じゃないし・・・・これでも立派な女の子だよ」
「ううん。違うの」

何が違うの？何を言おうとしたの？

「女の子なら顔に傷を付けたらダメだから戦っちゃダメ」

やばっ、可愛いし・・・。ダメって指立てる人初めて見た。

「ボクを傷つける事が出来る人なんていないよ」

だってボク最強だし、一度も怪我したことなんて無いから。

「それでも心配だから」

トクンと胸が鳴った。なんで可愛いことを言うんだろう？
それにボクは、那瀬が傷付くところなんて見たくない。

「外の人は、見た事無い服だしね」

平安時代の平民風の服だった。
そういえば、ボク達の服も変わってたんだ。ボクのは、黒で統一された平安時代の貴族が着るような服で、那瀬のは、薄いピンクの羽衣だった。

「天女みたい・・・」
「え？けっこう動きやすいんだよ。透けてないし」

羽衣って、透明なイメージがあったけど・・・。見た感じは透明っぽいのに、全く透けてない。　羽衣一枚の布で巻かれてるみたいだし。どれだけ長くて大きいんだろう？

「もしかして伸縮するの？」
「うん。伸びるよ・・・・ほら」

那瀬は、羽衣を引っ張った。ゴムみたいに伸びた。

「なんでもアリな世界なの？」
「楽しいね」

うん。無表情で言っても分らないや。もっと那瀬のこと分らないとダメなんだね。

「これからどうするんだい？」
「・・・戻り方分らないし」

そう。どうして、どうやって来たのか分らないから方法なんて見つからない。

「とりあえず助けた人に話を聞きましょう？」
「そうだね」

ボク達は、村で唯一の生き残りだった男の家に向かった。
あぁ。ボクが、やっつけた奴はどっかの野原に衣服無しで放置されてるよ。男がこの後、どうなるか分らないけどね。

「なに妖しい笑みしてるの？行くよ」
「ううん、何でも無いよ。さて、行きますか」

「貴女たちは・・・」
「話を聞きたいんですが・・・」

那瀬が言った途端に暗くなる男の表情。

「実は――――」

男の話はこうだ。
さっきの悪い奴のボスが、他の村人を監禁まがいなことをしてるらしい。
この男は、たまたま出かけてたから助かったらしい。

「じゃあ、さっきの悪い人は残った貴方を？」
「はい・・・」
男が力無く言ったことに不思議に思った那瀬。
「他に何か？」
「娘が・・・隣りの街の貴族の息子と婚約を結ぶはずだったのに・・・」
なるほどね。捕まってしまったか・・・。
ボクは、こういう奴等が一番嫌いだ。
「私達が助けに行きます」
“達”？ボクもか・・・。嫌じゃないんだけどね。那瀬が危ない目に遭うと嫌だし。
「すみません・・・私が不甲斐ないばかりに・・・」
男は悲しげに言った。この世界には騎士団とか無いのだろうか？
現実から目を逸らしたいよ。だって、目の前には山賊やら何やら危ない人達がいるから。
なら、ボクが騎士団を創ってみようかな？

世界の不純（2）

ウチは、サランといいます。とある村から、山賊に連れられて来ました。
ウチ以外にも数名村人がいる。ウチの知り合いばかり。村が小さいから当たり前なんだけどね。

「サランだけは、何があっても守るからね」
「うん。ありがとう」

隣りのおばさんが言った。ウチが一番年下だからだろう。
おばさんの言葉が励みになって勇気が出た。
はぁ・・ルイ様・・・もし、ウチが死んでしまったらルイ様は別の誰かと婚約しちゃうの？ウチ以上に綺麗な人と・・・。

「そう。目の前の美しい人みたいに・・・・・・・・・って、え！？」

だれ？ウチの村には、こんなに美しい人なんていなかった。
同じ女なのに、心臓が高鳴った。

「なんで眼鏡外すかな？那瀬」
「見えにくいもの・・・」

少年っぽい子が言った。眼鏡って何かな？
女の人・・・ナセ？珍しい名前の人は、綺麗な声で言った。
冷たく氷のようだったけど、なぜか暖かみがあった。

「だれ？」
「私は那瀬・・・」
「ボクは乃天」

なんとかして、絞り出した声。那瀬とノア・・・か。
ノアの雰囲気がルイ様に似てる。

「山賊は、やっつけたから・・・もう大丈夫よ」

那瀬の言葉に、村人全員が叫んだ。

「なんで？」
「貴女のお父様から聞いたの」

お父さん・・・無事だったんだ・・・良かった・・・。
ポロポロと涙が流れた。那瀬はウチを優しく抱き締めてくれた。

「とりあえず帰ろうか・・・」

那瀬の優しい声でみんな立ち上がった。
牢屋の檻は、ノアって子が、珍しい武器で切った。切った・・・
って、けっこう硬いよね？

みんなで洞窟を出た。

いきなりだけど、ボク達が、この洞窟に入ってからの話をします。

「ここね・・・」

那瀬の言葉にボクは、前を見た。
見た目は悪の巣窟って感じだった。

「入るわよ」
「待って！！」

どんどん入ってく那瀬の腕を掴んで止めた。

「なに？」
「那瀬はボクの後ろにいて・・・ボクが戦うから」

武器も無い那瀬は無防備だから、ボクが那瀬の剣と盾になるから。

「分った・・・」

ボクは、那瀬の前を歩いた。
トラップとか無くて良かった。
途中現れた山賊の仲間は、ボコボコにやっつけた。
ボクに敵う奴なんていないから記しても意味は無いし。

「とりあえずボスを倒しましょう」

確かに、村人を連れたまま戦うのは辛い。
そして、ボク達は大きな扉の前に立った。

「那瀬は、ここにいて」

嫌そうな顔をしたが、頷いてくれた。

那瀬を扉の前に置いて、中へと入った。

「誰だ？お前・・・」

趣味の悪い服を着た男がいた。
武器は大男と同じ長さの斧だった。

「楽しめそうだね」

ゾクゾクするなぁ。ボクに敵ってくれれば良いんだけどな。

「っく！！」

大男は、何も言わずに武器を振ってきた。
やっぱり遅いね。斧だもんね。
ボクは、斧の刃をヌンチャクで防いだ。

「力弱いし・・・つまんない」

思ってたよりも力が無かったのかショックだった。

「・・・キミはボクが壊す。弱い者はいらない。必要なのは強者だけ・・・」

目をキッとさせて睨んだ。そして、ヌンチャクを構えた。

「・・・排除」

駿足で大男に近付いて背後から背中を殴った。

「ぐはっ」

鈍い音が響いた。大男は、何度か転がって仰向けになった。

「キミを、ここで殺ってもいいが・・・一応、選択肢をやろう。山賊なんて止めるか、ボクの騎士団に入るか、ここで死ぬか・・・」

男の首にヌンチャクを突き付ける。男は苦しそうに言った。

「騎士団・・・？」

「そう・・・醜い奴等を潰す正義の・・・・ね。もちろん山賊の仲間もね」

この選択肢に乗るかはキミ次第だけどね。

「・・・くくく。騎士団な・・・おもしれー」

男はニヤッと笑って言った。

「団長は、お前が？」

「ボクはならないよ」

「ちっ。つまんねー」

つまんなくて結構だよ。だって、いつか帰るなら無意味に等しいから・・・。

「どこでだ？」

「後で連絡するよ」

どう連絡するとか、この際気にしないで・・・。ボクに出来ない

ことは無いから。

「ノア・・・」

部屋を出ると那瀬はボクに近付いてきた。
心配してくれたのかな？

「さて、行こうか」

地下を下りてくと、檻が見えた。あれが牢屋のつもりだろう。

「どうやって開けるの？」

那瀬の言葉にニヤッと笑うボク。

「ぶっ壊す」

那瀬が、ハテナを浮かべてたけど、ボクは気にしなくてヌンチャクを構えた。

「・・・・ノア」

金属独特の音が響き、檻は円の形に、くり取られた。
那瀬は、呆然としてた。そんな姿も可愛いけどね。
中には村人がたくさんいた。女の子もいて、あの人の娘なんだろうな。

騎士団のメンバーが出来て良かったよ。
まず、どこに騎士団の本部を創ろうかな？

世界の不純（3）エピローグ

「こっちの方に街があります」

ボク達は、村の隣りの街まで行くことになった。理由は・・・。

「娘を、隣りの街まで連れて行ってくれ」

サランの父親が言ったからだ。サランの婚約者は心配してるだろうからね。

「そして、戻って来なくて良い」

「お父さん・・・？」

言った後、父親は消えてしまった。

「どういう事？」

「たぶん、幽霊ね。娘の幸せを何よりも願ってたから逝けなかったんだ」

そうなんだ。サランは、ボーッとしていて、次第に頬に水が流れた。

それは涙で、両手で顔を覆った。

那瀬はサランの背中を撫でた。

「うぅ・・・お父さん」

「貴女は、お父様の分まで幸せにならなくちゃいけないわ」

優しく声を掛けてる那瀬。
それに何度も頷くサラン。
「“ありがとう、すまない”って聞こえたのボクだけ？」
「いえ、私も聞こえたわ」
「ウチも・・・・」
そっか。良かった。サランにも聞こえて。
「逝けたよね？」
「もちろん。でも・・・・」
那瀬が歯切れの悪い言い方をした。サランは悲しい表情になる。
「サランが幸せになればお父様も幸せだと思うわ」
「っ！！」
やっぱり、その人が亡くなったら、幸せかどうかを決めるのは、生き残ってるボク達なんだな。
例え、恨んだまま消えてしまっても、ボク達が幸せで暮らしていかなきゃいけないんだ。
その人の分まで必死に、足掻いて生きていかなくちゃ・・・・。
「隣り街まで送るわ」
「・・・ありがとう」
泣きやんだサランを見てから喋り出した那瀬。
「もちろんボクの後ろを歩いてね」

はいはい、と軽く言った那瀬。なんか冷たくなったような。

ウザいなぁ。山賊。アイツら以外にもいるのか？
ボクは、半殺しで倒してく。
だって那瀬達に見せるなんて失礼だからね。

「・・・はぁ」
「どうしました？」

溜め息吐いた那瀬に聞くサラン。

「いえ・・・ちょっとね」

どうしたんだろう？顔色が悪いね。

「大丈夫？」
「街まで後少しですから、着いたら休みましょう」

サランに寄り掛かりながら歩く那瀬。
心配だ。

「見えました！！」

サランの声に頭を上げると、レンガの街だった。遠くに一際大き

い建物が見える。

「あれは、この街のお城です」

ふ～ん。なるほどね。街か・・・。

「あそこに宿屋があります」

「キミの婚約者は？」

「那瀬が一番です。その後で行きますから」

ボクは、那瀬を背負った。サランは先に歩く。

「ここです」

至って普通の宿屋だった。

ボク達は部屋を借りて中に入った。

ベットに優しく置いた。

「タオルです」

サランは、水に濡したタオルを持ってきて、那瀬のオデコに乗せた。

「良かった・・・大きな病気とかじゃなくて」

「疲労だね・・・。少し休めば大丈夫だよ。サランは行って良いよ？」

「でも・・・」

何かありそうなサラン。そんなに心配なのかな？

「ノア・・・行ってあげて」

那瀬？具合が悪いキミを置いてくなんて出来ないよ。

「私は眠ってれば大丈夫だから、後で話を教えて？」

「うん・・・分った」

本当は嫌なんだけどね。那瀬が、そこまで言うんだから。

「ごめんなさいノア・・・」

「いいよ。行こうか」

ボク達は、那瀬を置いて、お城に向かった。

お城の王様に話せば騎士団のこと何とかなるかもしれないね。

なら、行く意味はあるよ。

8話　不穏な空気（1）プロローグ（前書き）

セリフとセリフを空けました。多少読みやすくはなった・・・・かも（かもかよ！！）

8話　不穏な空気（1）プロローグ

「城がデカすぎるのか、人が小さいのか・・・」

ヴェルサイユ宮殿より、大きい気がするのはボクだけ？
まぁ、異世界で土地が余ってるから当たり前なんだろうけど。

「この世界には、街はここだけなんです」

はい？何ですって？

「あとは小さい農村ばかりなんです」

「じゃあ、みんなここに住みたいんじゃ・・・」

「みんな憧れてます。都会だから」

なるほど、村ばかりなら憧れるのも分るな。

「この世界は小さいですから、大体二週間寝ないで歩けば一周しちゃうんです」

小さっ！！二週間寝ないでって無理だけど、狭い！！

「そんな小さい世界ですから街はここだけなんです」

なるほど、これなら騎士団なんて考え付かない。でも、城ならあるはず・・・。

「誰だ！！」

厳ついオッさんが話し掛けてきた。騎士団って感じじゃ無かった。

「ルイ様に話があります」

「許可証は？」

「ありません・・・」

アポイントメントだろうな。通称アポ。

「婚約者にも会わせない気かい？」

「貴女の名前は？」

ボクが言ったら、オッさんはサランに聞いた。　「サランです」と、言ったら奥に入って行った。

「ありがとうノア」

「気絶させたかったけどね」

ボクの言葉に苦笑いを浮かべたサラン。
数分したら、オッさんが帰って来た。

「客間にどうぞ」

ボク達は、案内され、客間に着いて、イスに座った。
一時間位待たされてる。

「わざわざ来たのに、何なの？この歓迎は・・・」

「ルイ様は、お忙しい方ですから」

ムカつく。ボクを待たせるなんて。サランと関係無かったら、破壊してたよ。

「！！」

廊下から異様な気配を感じて、サランの近くに行った。

「サラン・・・ボクの後ろに隠れてて」

「え？」

何がなんだか分らないサランは、戸惑っている。

「・・・無粋な歓迎だね」

「！？」

更にゴツい奴等が現れた。剣やら槍を構えてる。

「どういう・・・ことですか？」

「ルイ様は、もうサランという娘と婚約している！！」

はあ？どういう意味だよ。サランは後ろにいるだろ！！

「サランは私です！！」

「不届き者！！サラン様を汚すな！！」

ゴツい奴等のリーダーみたいな奴が怒鳴る。

「じゃあ、その“サラン様”に会わせなよ」

「貴様！！」

ボクは挑発気味に言った。やっぱり怒った。

「騒がしいぞ！！サランが怯えてるだろう！！」

現れたのは、ボクに似たような雰囲気の男。
髪は、ボクは黒に対して奴は銀髪だった。

「ルイ様！！」

「誰だ？」

ルイと呼ばれた男は、サランに言った。サランは、目を見開き涙が落ちた。

「この不届き者がサラン様を名乗ったのです」

「・・・・そう」

何かが変だ。那瀬なら分るだろうが、ボクには分らない。

「やっぱ無理にでも那瀬を連れて来れば良かったかな」

今さら後悔してるボク。

別に、負けるなんて無いけどさ。

「・・・ルイ様」

細い声に驚いた。ボクは、窓を探したが見つからない。

「ちっ・・・」

イライラが高くなる。ムカつく。

「魔女かしら？」

一番聞きたかった声がした。

「那瀬！！」

ゴツい奴等は背後から声がして驚いている。
誰の声か分らないが、ルイの名を呼んだのは確かだった。

「まさか、魔女と会うなんてね。何でもアリなのは楽しいわ」

なんと呑気なんだろうか。
でも、ホッとしてる自分がいたのに驚いた。

「・・・貴女・・は？」

女の声がした。たぶん偽サランだろう。

「初めましてルイ様、魔女さん。ワタクシは那瀬優妃と申します」

お嬢様の雰囲気を帯びてる。流石だなぁ。

「・・・魔女・・・？」

「人を操っても心だけは操れませんよ。特に愛し合ってる者なら・・・」

偽サランは「え・・・」と、言った。
ルイを見ると、泣いている。

「ルイ様・・・」

「ボクが連れて来る」

ボクは、サッと瞬歩(しゅんぽ)で、ルイの元に行き、サランの元に戻った。
ちゃんとルイを連れて来た。

「ルイ様！！」

「ごめ・・ん・・な？・・・サラ・・・ン・・・」

操られながらも、涙を零しながら、サランの頬に手を添えて言ったルイ。
サランは、ルイを抱き締めてた。

「・・・分ったでしょう？真実の愛なんて、そういうことよ」

「・・・わたし・・・みとめない・・・あい、なんて・・・」

偽サラン、魔女は何度も何度も同じセリフを言う。
魔女は狂ったように叫んだあと、何かの魔法をかけて消えた。

また、ボクの予定が狂った。
何なの？あの女・・・魔女だからって、ボクの邪魔しないでよ。

不穏な空気（2）

「無事かい？みんな・・・」

部屋に煙りが纏わりつく。
煙りが薄れたら、ボクは、みんなの心配した。

「私は平気だけど・・・」

「みんなが・・・」

やっと煙りが晴れて、辺りを見ると、ゴツい奴等が石にされてる。

「・・・・そんなっ」

サランの悲痛の声が部屋に響いた。

「たぶん・・・他のみんなもね・・・」

那瀬の言いたいことは、こうだろう。無事なのはボク達だけ・・・
。

「魔女の呪い？」

「ヒドいよ！！どうして、そんな酷い事出来るのよ！！」

サランは、泣きながら叫んでる。
分るけど、落ち着かなきゃ・・・。

「サラン・・・。まずはルイ様を休ませなくては・・・」

那瀬の言葉に、ハッとしたサラン。
ボクは、ルイを持ち上げた。
場所を聞くと、サランは「こっち・・・」と、元気無く言った。

「那瀬？」

「先に行ってて・・・考え事してるから」

ボクは頷いて、サランを追った。

部屋は、豪華でクイーンサイズのベットがあったり、カーテンも窓もデカい。
ソッとルイをベットに置いた。
男のくせに、細いし軽い。こんなんでサランを守れるのかよ。
サランは、ルイの手を握り締める。

「ボクは那瀬の元に行くから」

「ありがとうノア・・・ごめんね・・・巻き込んで・・・」

弱々しく言ったサランの頭を優しく撫でて出てった。

「那瀬？」

寂しそうに窓の外を見つめる那瀬。
ボクが声を掛けたら・・・。

「・・・苦しいね」

どこか悪いのかと思った。でも、違うようだ。

「あの子の目・・・助けを求めてる目だった」

助け・・・か。理由も無く、あんな事するわけ無いもんね。

「助けたいって・・・ダメかな？」

「良いんじゃない？キミが決めたなら」

ボクに止める権利は無いからね。
ただ、ボクは那瀬を守るためにいるんだから。

「でも、方法が・・・いくら探しても見つからない」

悔しそうに言う那瀬にボクは、どうすることも出来なかった。

助けたいって言う那瀬に、ボクが出来ることは何だろうね。

好きな人のために、戦うしか出来ないボクは、役立つに等しい。

不穏な空気（3）エピローグ

「置いてきて良かったかな？」

那瀬は、ふと言った。今、ボク達は、魔女の館にいます。
いきなりだけど、二週間なんだよ？この星一周。だから、そんなに時間掛からないし。

「ルイは意識不明、サランは看病。連れてくなんて無粋な真似やめなよ？」

「・・・分ってる」

那瀬の気持ちは分るけど、サランなら魔女に何をするか分らないし、助けるなんて出来ないからね。

「・・・平屋建てかい？」

あんなデカい城の後にこれは無いでしょ？
小さいし、狭そうだし・・・。

「とりあえず入ろ？」

「そうだね」

まぁ、相手は魔女だし無理はしない。

「雑魚もいないって・・・罠？」

「違うと思う・・・」

自信が無いんだ。珍しいな。

「・・・きたの・・・？」

ヤバいね。目が危ない。狂気ってとこだな。

「話を聞いて」

「きくわけない！！」

那瀬を遮るように話す。たどたどしい言葉に驚く。

「どうして？わたしじゃ・・・・だめなの？」

何を言ってるんだい？意味が分らないよ。
こんな事なら、調べれば良かったな。

「すべてが・・・わるいんだ・・・あははハはハハは・・・こわせば・・・・・・・！？」

「那瀬！！」

頭を抱えて笑ってる魔女に抱き付いた那瀬。
魔女は驚き、もがく。

「はなせっ！！はなせっ！！・・・あ」

手をバタバタ動かしたせいで、魔女の爪が那瀬の綺麗な頬に、赤い線が出来た。そこから、綺麗な血が流れた。
今すぐ魔女を、殺したかったが、ウズウズしてる自分が、酷くムカつく。

那瀬の血・・・もっと流れたらキレイだろうな。あの無表情が壊れる瞬間を見たいと思ってしまう。
ドクンドクンと、痛いほど脈が打つ。
あぁ。あの天女の羽衣を血に染めたい。
狂ってくる自分を止める術を知らない。
ヤメロ・・・。那瀬に手を出すな。

「大丈夫よ・・・私がいるから・・・」

那瀬の優しい声を遠くに聞きながら意識が途切れた。
那瀬の焦った声が、部屋中に響き渡る。

「ノア!!」

「あっ・・・ど・・・して・・・」

喉がカラカラで、声が上手く出ない。
なんとか絞り出した声は、年寄りの声だった。
自分が傷付けたのに、自分を抱き締める女を見た。
身長は、アタシよりもあるのに、身体は細い。折れてしまうんじゃないかというくらいに。
そんな身体で、必死にアタシを抱き締める女。

女の身体は温かい。アタシは冷たいのに・・・。アタシの身体を暖めようとしてる感じだ。

「・・・分らないわ」

女は、遠く・・・一緒に来た男みたいな女を辛そうに見つめると、アタシを見て言った。
分らない？アタシのせいで傷を負ったのに。それなのに止めようとしたの？

「・・・アタシ」

「理由を話して？一緒に考えてあげるから」

女はアタシの言葉を遮り言った。
話す？考える？何を言ってるの？
なんて人の良い女だ。こんなんじゃ、誰かに騙されるよ。

「慈善ばかり言ってると、後で痛い目に合うよ」

「確かにね・・・でも、本音だから」

口が少し上がった。分りにくいけど笑ってるように見えた。
この子は、表現を表に出すのが苦手なんだ。

その優しげな顔に、アタシの顔や体が熱くなってく。
この子は、知らず知らず味方を作ってくんだ。そして、自分に惚れる者を増やしていくんだ。
手強いわけだね。アタシは、最初っから勝てなかったってことじゃん。

「あの？」

ずっと黙ってたアタシを心配そうに見る女。

「・・・アタシは真実の愛が欲しいんだ」

知りたいんだ。愛が欲しいんだ。
この子といれば見つかるかな？

「でもね、私この世界の人間じゃないの。いつかまた帰ってしまうの」

え・・・。帰る？寂しいな。
よしっ！！アタシも、この子に会いに行くぞ！！

「私の名前は那瀬、あの子はノアよ」

「アタシは、弥衣というの」

「ヤエ？私の世界の名前っぽいわ」

まぁ、アタシも、異世界から来たんだよね。そう言うと、那瀬は驚いてた（ような顔）

でも、那瀬の世界とは別みたいだね。魔法が使えないみたいだし。

「んっ・・・」

「大丈夫？ノア・・・」

ボクはどれだけ寝てたんだろう？魔女と仲良く話してるし。

「アタシはヤエっていうの宜しくね」

「あ、うん」

那瀬の話を全て聞いた。

ごめんね那瀬。ボク、那瀬に狂気になってた。今は言えないけど、いつか変われたら良いな。

「これからどうするんだい？」

「とりあえずサランに会おう」

ボクの言葉に頷いた那瀬。
だけどヤエは言った。

「アタシは残るよ。魔法は切れてるし、嫌われてると思うし」

結局、コイツのことが分らなかったな。たぶん、ボクと同じく狂気に冒されてるんだろう。歪み切った性格なんだね。

「また会おうね」

「会いに行くよ。魔法でね！！」

便利だな。魔法って。ボクも使えたら良いんだろうな。

ヤエと別れ城に向かうボクら。
今度こそ、騎士団を作るぞ！！

不穏な空気（3）エピローグ（後書き）

ヤエは、いつかまた出ます。作者の気分次第です。良い子で待っててねヤエ！！

会える日を（2）

「んっ・・・あれ？」

ボクが目を覚ましたのは、どこかの屋敷だった。
センスの良い毛布だった。カーテンも癒される色だったし。

「大丈夫ですか？」

この男、確か那瀬の運転手だった男・・・。
もしかして戻って来た？
昨日は、宴会があって沢山の酒を呑んだ。那瀬も飲んでたよな？

「那瀬は？」

「お嬢は、まだ眠ってます」

変な呼び方・・・。
那瀬はまだ寝てたんだ。って、那瀬も帰って来てたのか。
ボクは、ベットから下りて那瀬の部屋に向かった。男は止めることすらしなかった。

「寝てる・・・」

グッスリと眠ってる那瀬。頬を撫でても起きる気配がしない。

「ボクが強くなるまで那瀬には会わないよ。だから、待ってて？ボクが、心を強くするまで」

キミに狂気しないように。キミを傷付けたくないから。

「帰るのですか？」

「うん。ボクは弱いから修行するよ」

玄関付近に近付いたら男がボクに寄って来て話し掛けた。

「貴女の名前は？」

「ボクはノア」

「ノア様ですか。私は琉川です」

なぜ自己紹介したんだろう？どうでも良いけどね。

「呼び捨てで良いよ。那瀬に伝えて？」

「何でしょう？」

ボクは、目を瞑って、一度自分の言葉を探した。琉川は何も言わない。

「しばらくは会えないけど異世界に行ったら絶対戦わないでねって・・・」

ボクが言ったら、息を飲む音がした。
琉川は「またか」と、喋った。
どうやら琉川も一緒に行ったらしい。
ボクは「さよなら」と、言って行くべき場所に向かった。

みなさんこんにちは。私は、琉川です。分りますって？そうですか。
お嬢は、また異世界に行かれたようですね。私も行きたかったです。
あのノアという子は、お嬢を守ったようで安心致しました。
だけど、なにかあったようですね。辛そうな表情で屋敷を出て行かれました。
でも、何かを決心したようでもありました。

「んっ・・・」

起きたようですね。良かったです。

「頭いたい・・・」

第一声がソレですか？二日酔いなんて・・・。

「お酒でも飲まれたのですか？」

「ん・・・めでたい日だった」

め、めでたいですか？お嬢らしくない発言ですね。

「ねむい・・・」

「寝過ぎですよ。お酒お強いのに、どうしましたか？」

私の言葉に悩んだお嬢。らしくない。悩み終え答えた。

「嬉しかったのかな？」

「え・・・」

「友達が結婚したのって・・・」

嬉しそうな声だけど表情に変化なし。
あちらの世界に友達を作ったのですね。

「ちょっと出かけても？」

「良いですが、お一人で？また異世界に行かれるかもしれません」

少し考える素振りをしたお嬢。自己解決した。

「当分は大丈夫みたいなの・・・」

どういう意味？何を知ってるんだ？お嬢。

「じゃあ行ってくるね」

「あ・・・・・行ってしまった」

なんなんだろう？何を考えてるんだ？

微妙にムカつきます。私だけ置いていかれてるようで・・・。

私に何かを言う権利は無いのは分ってる。でも、私は貴女が好きなのです。他の誰にも渡したく無いんです。

貴女を独り占めしたいんです。

会える日を（2）（後書き）

帰って来ちゃった！！ノアは当分出ません（と思う）でも、いつかはオリジナルストーリーを創る（つもり）

会える日を（3）エピローグ

初めまして、僕の名前は、壬生（みぶ）　和音（かずね）です。
隣りにいるのは妹の、壬生（みぶ）　花菜（かな）
僕の年齢は、２０歳で、妹は、１１歳です。
カナの性格は・・・・怖くて語れません。唯一言えるのは、お腹が・・・・。

「お兄ちゃん？」

何でもありません。すみません。
僕としては、シスコンでは無いつもりですが、カナは可愛いです。

「ねぇ・・・・」

おっと。黙ってたからカナが呆れた目で見てくる。

「なに？」

「あの人綺麗じゃない？」

カナより綺麗な人がいるわけが・・・・。

「綺麗だ・・・」

「ねっ！！話しかけようよ！！」

「む、無理だよ！！」

初めまして、私はカナです。
兄が失礼な事を考えたようだけど良いや。
兄の性格は、天然で、知らず知らずに毒舌。しかも、私以外にエスなんだ。私は、その上をいく。
あ、あの人、可愛いし綺麗だ。お姉様になってほしいな。
私が話してもオドオドしてる兄。うざったいなぁ。
そうだ。兄と結婚したら私のお姉様になるじゃん！！私って頭良いな！！よしっ。アタック！！

「あの！！」

兄が何か言ってるけど無視して女の人のもとにに向かった。

「あのぉ・・・」

「なに？」

腰を曲げて私の目線に合わせた。
声は優しげな声だった。なんか表情無いけど。

「あのウチの兄と結婚してください！！」

「はい？」

「カナ！！・・・すみません妹が・・・」

何よぉ！！私が折角、女性経験の無い兄を思ってのことだもん。

「何の用でしょうか？」

「兄と・・・」

「しつこい！！」

うぅ・・・。私の言葉を遮って話さないでよ兄。
腹黒でもね。兄には弱いんだよね。ブラコンって訳じゃないし。
好きだけどね。

「馬鹿な妹ですみません」
「ふふ、可愛いじゃないですか」
優しい人だなぁ。やっぱ欲しいな。
法律変えてでも結婚したいなぁ。
「あの私は、カナって言います。お姉様の名前は？」
「私は、那瀬」
「僕は、和音です」
あれ？那瀬って・・・大富豪の那瀬財閥の御令嬢なのかな？
「那瀬って・・・凛音大学の？」
「キミも？」
リオン大学かぁ。
カッコいい名前だなぁ。凛々しい音の学校。って音大だったけ？
行ってみたいな。
「今度、文化祭あるからおいで？」

「いいの！？」

「まぁ、僕が案内してやるから」

えぇー。お姉様に案内して欲しいなぁ。

「今度おいでよ」

「はい！！」

幸せだなぁ。お姉様にまた会えるんだ。

「じゃあね。カナちゃん。カズネくん」

「お姉様ぁ呼び捨てで良いですよぉ！！」

「僕も！！」

手を振って帰るお姉様に、大きな声で話す私と兄。

「いつなの？」

「文化祭は来週だよ」

楽しみだなぁ。お姉様は何をするのかな？

「お兄ちゃんは何をするの？」

「僕は、演劇・・・オリジナルのギャグだって」

「何役？」

「魔王の分身の勇者」

意味が分らない。創った人は頭が変なのかな？

「ナレーションがいないんだよな」

「私やりたい！！」

「まぁ、良いんじゃない？」

楽しみだ！！思いっ切り無茶振りしよっと！！

黒いって？そんなこと知らないわよ。だって久し振りにお兄ちゃんを苛めれるんだから。

9　会える日を（1）プロローグ（前書き）

すみませんページを間違えました。

9　会える日を（1）プロローグ

「さよなら？」

城まで行くと石化してた人達が元に戻ってた。
サラン達のもとに向かった。
那瀬は、説明するとサランは悲しげに言った。

「なぁ。那瀬さん達が帰る前に結婚式しないか？」

「え・・・」

ルイの発言に真っ赤になるサラン。

「良いね・・すぐにでも・・・」

「・・・サヨナラは嫌だもん」

サランは泣きながら我が儘を言った。ルイはサランの頭を撫でながら「しょうがないんだ。俺が側にいてやるから」と、言った。

「じゃあ、今日やろう」

「はあ？何考えてんの？今日って・・・」

さすがに今日は早いだろう。

「いつ帰るか分らないしね」

「・・・はぁ分ったよ」

ボクの一言で喜んだサランとルイだった。
はぁ。どうなるんだろう？

「キレイね」

「そうだね・・・」

「あ、ありがとう」

今、いるのは教会の一部屋。

いきなりの結婚式だから、客はボク達だけ・・・。
サランはウエディングドレスに身を包んでる。
那瀬も着たらキレイだろうな。

「そろそろ行こうか」

ボク達は、サランの未来の旦那様の元へ向かった。

「さぁ入ろうか」

サランの父親の代わりにボク達がバージンロードを一緒に歩く。
ルイの元へ着いたら、サランを渡した。

「サランを幸せにしなかったら、ブっ飛ばすよ？」

「・・・絶対幸せになりなさい」

ボク達の言葉に頷いた二人。
ボク達は、席に着き二人の式を見ている。
そして、愛を誓い合ってキスをした。

羨ましいなぁ。いつか、歪んだボクでも誰かを愛せるだろうか。

「結婚式のあとに言うのもなんだけどね」

あれから一日経ったが、全く帰る気配は無い。
ボクは、ずっと考えていたことを言った。

「騎士団を創ったら？」

「きしだん？」

「街を守ったり、山賊とか多いから、町を守るためにとか」

「でも、城を守るのでイッパイだ」

確かに、普通だったらそうだろうね。

「ボクの知り合いに良い奴がいるから、本部を、ここに創ってくれれば・・・」

「う～ん。分った。ソイツらを連れて来てくれないか？」

まぁ、ボクが行く理由が無いけどね。

「ハァハァ・・・半日で来いって」

「仕事をやるんだから文句言わないでよ」

「は、はい・・・」

ボクがキッと睨むと敬語になった。

「コイツらが騎士団か？」

「ボクが今から騎士団の内容を言うから覚えろ。一度しか言わないから」

ボクの脅しにダラダラした身体をピシッとさせた。

「騎士団は、民のためにあれ、決して悪行はしてはいけない。常日頃から修行をすること。子供達の憧れであること。これは、騎士が絶えないようにするためにだ。これは、一番大事だ。仲間を大事にしろ。ボクから言えるのはこれだけ」

ボクっぽくない。まぁ、誰かが言ってたのを真似しただけだからね。

ボクは、仲間なんていらないし。むしろ邪魔。

ボクの望みが叶ってくれて良かったよ。これでサランみたいに悲しむ人はいなくなるだろうね。

10話　文化しゃい（1と見せかけて一日目）プロローグ

色々気になる題名だけど、こんにちはカズネです。妹は、学校で僕は舞台の練習中です。

“文化しゃい”じゃなくて文化祭ですからね。噛んだんだね。誰かとは聞かないで。

「オフコース！！我こそは勇者じゃ！！」

創った人出て来いや。何ちゅーセリフを言わせる気だよ。僕でもキレるよ？

天然って周りが言うけどさ、天然って何さ。自然ってことでしょ？なら良いじゃん！！

「壬生！！勇者の格好でブツブツと根暗に独り言を言ってんじゃねーよ！！」

声に出てたんだね。すみませんでした。

「ふふ、カズネくん頑張ってるね？」

その場に似合わないほどの澄んだ声がした。

みんなは「那瀬様」と、言ってる。

「那瀬・・・呼び捨てでいいって・・・」

僕は、舞台から飛び降りて、那瀬の元へ向かった。

「ごめんね。カズネのところは、演劇なんだ」

「うん。那瀬のところは？」

「私？メイド喫茶だって・・・」

に、似合ってる。絶対行きたい！！

「舞台が優先だぞ」

さっきから話し掛けてくる友人Ａがうるさい。

「テメーが頑張れば良いじゃないか」

「うっ・・・」

カナからは、エスだって言われるけどよく分らん。そのつもりも無いし。

「第一、勝手に決めたのはそっちだろ？文句言うなら僕は出ないから」

「わ、悪い！！」

なんかイライラした。那瀬の前だってのに。

「頑張ってね。私見に来るから」

那瀬の言葉に張り切るみんな。凄いな愛されてんだ。

那瀬が来るなら、僕も張り切るかな。

はい。妹です。誰って？はい。呪いますよ？はい。冗談ですよ？はい。見る人がいなくなったら私が消されますよ。

私はカナです。めんどくさい授業を受けてます。ダルいけど。

「三国志の総大将を三人答えろ」

誰かの趣味かよ。とあるゲームから三国志が好きになったからって、小学生に何を質問してんだろ？ってか、私の年だったら出来ないじゃんか、そのゲーム。

「ムカつくーー！！」

「み、壬生さん？何が気に入らないの？」

「なんで女同士で結婚出来ないの！？」

私の言葉にオロオロしだす先生。面白い。このままからかっちゃおう。

「先生どーにかしてください！！」

「む、難しいですね。結婚は・・・うぅ」

この先生も結婚まだな三十路だし。童顔だけどね。オタっ子（オタクな子）って感じ。

「あ、あのね授業・・・」

「魏は、曹操。呉は、孫堅。蜀は、劉備です。私的には一番強い呂布が好きです」

「せ、先生も使いやすくて好きよ？」

何が？やっぱりゲームの話だったんですか？

「オタっ子先生」

私が言った言葉にクラス全員が「オタっ子先生」と、声を合わせた。

泣き出したオタっ子先生は走り去った。

「うーざーいー」

溜め息を吐きながら携帯を見るとメールがきてた。

オタっ子先生は、数分後戻って来るから気にしない。いつもの事だし・・・。

「えとえっとー『那瀬は、メイド喫茶をするらしい』・・・・マジか！！」

兄からのメールに「キャッホイ」と、奇声を上げながら帰る。
途中で、オタっ子先生に会ったけど早退した。

私にとってお姉様は神様に等しいもの。
邪魔をするものは滅せよ！！
私は誓う！！このブラックな本に！！お姉様を守ると！！

文化しゃい（2と見せかけて二日目）

とうとう明日だぁ。色々とあったなぁ。
僕は、カズネです。分りますって？まぁ良いですけど。
今日は、前夜祭です。準備も一通り終わり、盛り上がってます。
あ、那瀬がいた。

「那瀬！！」

「花火が上がるね」

那瀬の見ている方向を見ると、闇に浮かぶ大輪の花。何度も打ち上がる。ドスンドスンと身体に響き渡る。
那瀬の横顔が、綺麗に色付いていて、いつもより美しい。
そして、魔法のような時間は終わった。

「なんか寂しいよね？花火の後って」

「心臓がギュッと握り締められる感じ・・・」

「このままで・・・って思っても時間は待ってくれない」

僕は、那瀬とこのままいたいって思うよ。例え叶わない願いでも・・・。

「今度さ・・・花火見に行かない？」

「カナと一緒に冬の花火をしましょう」

那瀬の言葉が嬉しかった。真冬の花火って感動的だ。

銀世界の中で、色とりどりの花火なんて夢みたい。

「夢心地で夢から覚めたんだね」

これぞ夢花火って事なんだね。

「那瀬〜！！」

「ナッチャン！！」

背後から、女の子と男の子の声がした。

「十代に三月・・・」

どうやら那瀬の友人らしい。女の子が三月。男の子が十代って名前みたいだ。

「ダレ～？」

「あ、僕は壬生　和音です。呼び捨てで」

「あぁ・・・俺は十代だって分ってんな」

那瀬が言ってたから分かる。

「早くナッチャンのメイド服見たいなぁ！！」

「三月だって着るでしょ？」

「コイツのは似合わねーよ」

幼馴染みなのかな？喧嘩するほど仲が良いって感じだし。

「あれからどうだ？」

何のことだろう？那瀬が暗い表情をした。

「ん。あったよ・・・。よく分らなかった」

僕の方が分らないよ。だって、何の話をしてんだろう？

「怪我は？」

「守ってくれた人がいたから」

十代の言葉に、きちんと答える那瀬。三月は、ボーッとしてる。

「はぁ・・・何かあったら言えよ？」

那瀬の頭を撫でる十代。胸の奥がズキッと痛くなった。

「うん。ありがとう」

大丈夫だよ、という風に十代を見つめる那瀬。　それに・・・と、言葉を繋げた。

「当分は無いから」

わけが分らないが、十代は知ってるようだった。でも、那瀬のことだから言わないだろうな。

その那瀬を見て、言うのを止めた十代。

「もう終わりだから帰る支度しないとウザい文句言われて恐怖の学校に閉じ込められるよ？」

僕の言葉に、ストップしたみんな。なんでだろう？

「カズネって見た目と違って毒舌だねぇ」

「あぁ・・・ブリザードが来たぜ」

ん？なんのことだろう？

僕って、そんなに冷たいかな？分らないけど・・・。

でも、明日は楽しみだな。あ、でも・・・セリフ覚えて無い。

文化しゃい（3と見せかけて三日目の午前）

やったぁ！！文化祭当日だ！！
あ、私はカナです！！なんでこんなにハイテンションなのかというと那瀬お姉様に会えるから。幸せですなぁ！！

「お兄ちゃん！！」

「カナ・・・そろそろ始まるから」

ということで（なにが？）体育館に来ました。

「エントリーナンバー七番・・・演劇で、勇者（なのか！？）の旅（らしきもの）です」

うん。ツッコミ入れて良いかな？なんで、括弧まで読んだんだろう？
あれ？ツッコミだったかな？今のって。

「ナレーションは主役の妹さんです」

私は、舞台の真中に立ちお辞儀をした。

あ、那瀬お姉様がいた。やっぱーい！！緊張してきた。
そして、移動したら幕開けした。

『昔々あるところに勇者と名乗る変態がいました』

「変態って！！」

うふふ、やっぱり面白いな。たくさん無茶振りしよっ！

『勇者ごときは、村人を殴りまくりました』

「え！？ごとき？」

「壬生、ツッコムとこそこかよ！オレ殴られるの！？」

村人役の男子生徒はお兄ちゃんにツッコミを入れた。
そして、お兄ちゃんは、“グー”で殴った。しかも本気で。やっぱりエスだね。

『それでも飽きたらず観客席に投げ飛ばしました』

「よっし」

「ぎゃーーーー！！」

お兄ちゃんは、男子生徒を担ぎ観客席に投げ飛ばした。男子と観客は悲鳴をあげた。
さて、進めなくちゃね。

『そんな最悪な勇者は、村人から嫌われていて魔王に生贄・・ゴホン・・・勝って来いと言われた』

「確実に生贄って言ったよな！カナ！！」

『行きました』

スルーか、と大きな声がしたけど、私がスルーした。
舞台は代わった。

『場所は代わり魔王城』

「はえーよ！！」

男の声がした。お兄ちゃんは、十代と呼んでた。知り合い？

『女好きのバカな魔王が言いました』

「あの・・私は女なんですが・・」

『勇者よ、私を苛めてと・・・・そして勇者は最大限の暴力をしました』

「え。イヤぁぁーー！！」

ポカポカと可愛らしい音を立てながら、お兄ちゃんは、魔王の女の子を苛めました。

って、あれ？魔王の分身の勇者じゃなかったっけ？

『どういう事なの！？勇者！！』

「なにが！！」

『魔王の分身の勇者じゃなかったの？』

お兄ちゃんは、あれ？と言った。ちゃんと台本には魔王が出てきてるんだよ？

「・・・オフコース！！我こそは勇者じゃ！！」

とことんおかしいんだね。脚本家が。

『発狂した勇者は、魔王に襲いかかりました。もちろん危険な方の・・・』

「変な事を言うな！変態！！」

失礼なお兄ちゃんだ。怒ったぞ。よし、更に苛めてやる。

『ナレーション（私）の命令は絶対だよね？』

「な、なにを？」

やっぱりイライラするから、お兄ちゃんなんか、恥をかかせて那瀬お姉様に嫌われてしまえ。

ブラコンって訳じゃないからね。だから苛めてやる。

『勇者と魔王の身ぐるみを全てはぎ取った』

二人の、え！？と、声がした。

『命令は絶対です』

「うっ・・・」

仕方なく魔王を見る勇者。魔王は、泣きそうにしてる。でも、僅かに頬が赤い。お兄ちゃんはモテるからね。

やっぱ止めた。なんかイラつくし。

『勇者は、魔王をコテンパンにやっつけました』

急に変えたから、疑問符を頭に浮かべた二人。
でも、なんでイライラしたんだろう？

「ごめんね。名無し子ちゃん」

名前が分らないからって・・・。
お兄ちゃんは名無し子ちゃんを踏んでる。名無し子ちゃんは嫌がって無い。ドエムなんかな？

『倒した魔王を報告するために村に向かいました』

なんか普通だけどさ、ムカつき・・・。ムカぽん・・。あんま浮かばないな。新語ってムズいね。って、関係無いじゃん。

『勇者は歓迎を受けた。勇者の両隣りは、女装したゴツい男だった』

あ、引きつった顔してるや。ちゃんと女装してるね。右隣りは、ガタイが良い、漢っぽい男。左隣りは、女装のはずなのに普通に女

の子に見える男の子。
可愛い～。身長も低いから女の子より可愛いかも。あんな可愛い子がサブキャラって認めたくない。

『左隣りの美少女は勇者の頬にキスをしました』

「うえ！？」

泣きそうなお兄ちゃんは可愛い。隣りの男の子も唖然としてるし。

「・・・・いやっ」

「僕だってイヤだ！！」

嫌がった。当たり前だけどね。
観客みんなはキスコールをしてる。

「カナ～！！」

私は、お兄ちゃんに呼ばれたけど無視をした。面白くないし。

「うぅ・・・すみません壬生さん」

「いや・・・頬ならまだマシだ」

男の子は決意を決めたようだ。お兄ちゃんに許可を得てから、お兄ちゃんの頬に可愛く、チュッとリップ音がした。

『はい。キモい芝居ありがとうございました』

「なっ！！」

「カナがやらせたんだろ！！」

顔を真っ赤にして私に叫んでる。

私は更に、キーモーイと言ったら青ざめた。

『勇者は、その娘と結婚して幸せに暮らしましたとさ。おしまい』

「不完全燃焼じゃんか！！」

『文句を言うなら、脚本家の勇者の右隣りの女装キモ男に言ってください』

「なんで知ってんだよ！！」

だったんだ。冗談だったのに・・・。アイツ何にも取り柄が無いじゃん。不細工だし、頭悪いし・・・。ぷっ、可哀相。

「グチャグチャな劇だったね！！」

最悪な気分のカズネです。カナは嬉しそうにしてます。やっぱり昨日のことを根に持ってるんだな。

昨日の晩ご飯のミートボールを食べたせいです。カナの大好物だったし。ごめん。

「でも、私は好きだったよ？面白くて」

那瀬は言ったけど、表情の変化は無い。

僕は楽しくなかった。

「ご苦労様、カズネとカナ」

その言葉で、疲れは吹っ飛びました。

やっぱり僕は、那瀬が好きなんだな。たぶん、今までよりも・・・。

「・・・・あれ？もしかして」

急にどうしたんだろう？キョロキョロしてる。

「お姉様どうしたの？」

カナも思ったらしく聞いた。
那瀬は少し悩んだ様子だったが、僕達に話した。

「十代の言葉が気になるよね？」

「うん・・・」

昨日のことだな。カナは、え～何～？と言ってるが、かまってやらない。

「信じられないけど、私は――――」

異世界か。信じられないけど、那瀬が嘘を吐いたりする子じゃないのは分かる。でも、現実として考えられない。

「良いんだけどね」

ズキッとした。嫉妬とは別の痛みがあった。
僕は好きな子のことを信じられないの？

「私は信じるよ！！お姉様が好きだもん！！」

カナの方が大人・・・いや、子供だから純粋なのかもしれない。

「ありがとう」

少しホッとしたような表情で言った。
普通だったら話したくないよな？変に思われるから。それなのに、那瀬は僕達に言った。
僕は最低だ。そんな苦しみに気付かなかったんだから。

「お兄ちゃん。深く考え過ぎだよ。好きな人だったら、信じ切らなきゃ。絶対的なんて、この世には無い。有り得ないなんてものも無い。だって、お姉様みたいな天女がいるんだから」

はぁ・・・何を悩んでたんだろうな。
どうしてたんだ？バカな僕。

「・・・だから、心配してたんだ十代達」

「そうね。だけど誰が飛ばしてるのか分らないうちはどうしようも無い」

てっきり分ってたのかと思ってた。
だから余裕たっぷりだと思ってた。だけど、そうでも無いみたいだ。

「まぁ予想はついてるけど」

ほぼ分ってんじゃん！！なんか、那瀬の性格悪い気がする。ちょっと腹が黒い？違うなら良いけど。

「アイツならやり兼ねない」

はい？那瀬の知ってる子なのかな？でも、僕じゃ、教えてくれないだろうね。

だけどね。僕達は、那瀬が心配なんだよ。一人で背負い込まないで、僕達に頼ってよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3605f/

クールな天女

2010年10月27日02時11分発行